

京都の平安遷都（奠都）記念祭と
内国勸業博覧会の歴史社会学的再考

小 松 秀 雄

Summary

The Historical Sociological Reconsideration on the Anniversary of the Heian Transfer of the Capital and the Industrial Exposition in Kyoto

KOMATSU Hideo

Kyoto (Heian-kyo) continued to flourish as the capital of Japan for more than a thousand years from 794 to 1868. But Kyoto (the old city) was faced with the political, economical, and cultural decline after the capital was moved to Tokyo (Edo) at the beginning of the Meiji period. In the cause of the regeneration and development of Kyoto, in the 28th year of Meiji (1895) the 1100th Anniversary of the Heian transfer of the capital and the 4th Industrial Exposition were held in Kyoto as important national and regional projects. In commemoration of the 1100th Anniversary, Heian Jingu was originated and Emperor Kammu (the founder of Heian-kyo) was enshrined. To commemorate the day of Heian transfer of the capital, Jidai-Matsuri, the pageant or procession of people in various historical costumes from the Heian to the Meiji periods was begun at the time of the foundation of Heian Jingu. Jidai-Matsuri (Historical Pageant) is now one of the three biggest festivals of Kyoto.

In this paper I intend to reconsider the 1100th Anniversary and the 4th Industrial Exposition from the points of view which are called the historical sociology of nationalism, the regional sociology of local governance, and the modern sociological theories of memory. These big two events in Kyoto were carried out as national projects for Japan (the Meiji state) in order to enrich the nation and build up the defenses. Of course, a great number of citizens in Kyoto and people of all parts of the country offered some contributions or supports to make these events a greater success. The 1100th Anniversary and the 4th Industrial Exposition would be symbolic of modern nationalism of Japan and modern localism of Kyoto in the Meiji period.

はじめに

明治維新後の京都では、都市全体の危機に直面し京都を再生するために政治・経済・教育等の幅広い領域で様々な改革が試みられた。例えば、全国に先がけて近代的な小学校が設置されたり、近代的都市へと脱皮するため先ず琵琶湖疎水や京鶴（京都―舞鶴間）鉄道の建設、続いて第二琵琶湖疎水＝発電所建設・上下水道設置・道路拡張＝電気軌道敷設という三大事業が進められた。そのような近代化の実践的な諸改革と事業が次々と実施される中で、明治28年には平安遷都（奠都）千百年（1100年）記念祭と第4回内国勸業博覧会が行われた。これらの記念祭と博覧会は、京都の近現代史の諸資料においては必ず名前が登場する大規模なイベントであったわけであるが、京都と日本の都市の歴史にとってどのような意義を持ったのだろうか、あるいは後世にどのような遺産を残したのだろうか。本稿では、1980年代から90年代にかけてフランスのピエール・ノラたちが『記憶の場』を発表して以来、人文社会諸科学の多くの分野において注目されている〈コメモレイション(comemoration)（記念・顕彰行為）〉とナショナリズムの歴史社会学＝文化社会史の観点から、明治28年に実施された京都の記念祭と博覧会という近代日本固有の〈コメモレイション〉にアプローチしてみたい。

なお、コメモレイションと記憶の研究動向に関しては、拙稿「大老井伊直弼のコメモレイションの文化社会史（その1）」において考察したので、本稿では改めて詳しく論述することはない。また、平安遷都（奠都）千百年記念祭と第4回内国勸業博覧会に関しては、拙稿「都市の祭りとコメモレイション」において取り上げてみたが、本稿では異なる視点と資料から再検討するつもりである。上記の拙稿を含め、本稿で引用する諸資料の出典については末尾の引用・参考文献のリストを参照してもらいたい。

1 京都の〈歴史意識〉と近代化

延暦13年（794）10月22日、桓武天皇は長岡京から山背（山城）国葛野・愛宕両郡の新しい都に遷り、そこを平安京と名づけ、延暦25年（806）に崩御するまでたゆまず平安京と平安宮の造営を続けると同時に、律令制度の改革などを実行した。日本史上、屈指の英雄であり大帝ともいべき桓武天皇が切り開き建設した平安京は中世以降、京都と呼ばれるようになるが、明治に至るまで千年余り都として栄えてきた。平成6年（1994）、平安遷都＝平安建都1200年を記念する祝祭が一年間、盛大に行われた。このような記念の祝祭は京都にとってどのような意義を持つのだろうか。祝祭の主催者である財団法人平安建都1200年記念協会の代表的な資料を引用しながら考えていこう。

「京都は、いま重大な岐路に立たされ、新しい選択に迫られている。世界に誇りうる歴史と伝統の都市を、どう甦らせるか、どう発展させるかについてである。……このなかで、

1994年、京都は建都以来、1200年の歴史を迎える。顧みれば、その歩みは、決して平安の大道ではなかった。現代にいたるまで、三つの大きな危機に遭遇した。第一の12世紀平安京の解体においては……第二の15世紀後半の兵乱による荒廃にあつては……第三の明治維新期の東京遷都による存亡の危機にあつては、あらゆる先進的な実験と空前の投資を行って都市基盤を整備し、京都近代化の道をひらいたのである。この三つの歴史的な危機を乗り越え、不屈の精神に支えられた知恵とエネルギーの発現は、わが京都の歴史的伝統である。この伝統的意志を全国的に宣言したのが、明治28年に行われた「平安遷都1100年記念事業」であった。それは危機を克服し、古都の近代化の成果を示しながら、さらに新しい指針を見出そうとする記念すべき大事業であった。この京都あげての創意にみちた記念事業の精神は、20世紀京都のスプリング・ボードとなって、新しい展開を遂げたのである。それから100年、京都は、多くの困難と課題を抱え込みながら、平安建都1200年を迎えることになる。この1200年記念事業は誕生の周期を祝う単なる祭り事に流れるものであつてはならない。現代京都の危機的状況をしっかりと見据え、その脱皮と創造的再生を図り、生き生きとした活力ある京都の21世紀への出発点としなければならないのである。」(京都新聞社編『公式記録 平安建都1200年記念事業史』、3頁)。

この引用文は1200年記念祭というコメモレイションの基本理念を高らかに宣言したものであり、〈1200年〉と〈記念〉と〈祭〉のモメントを見事に結びつけた文章になっている。平安京(京都)が建設されてからの1200年の歴史を振り返って、3つの大きな転機を取り上げながら京都の創造的再生のストーリーを語っている。何度も危機に見舞われながらも危機を乗り越えて1200年も続いたことを喜び祝い、たゆまず前進してきた都市と住民を称賛している。その上で、現代は4つ目の重大な岐路に直面しており、平成6年(1994)の1200年記念祭は現代の危機を見つめ直すまたとない機会であり、未来に向けてのスプリング・ボードとならなければならないと戒めている。それらの語りは、近代化の再帰的段階、あるいは再帰的社会やリスク社会の歴史的社會意識を反映しているといえよう。引用文中にあるように、明治28年(1895)に平安遷都千百年(1100年)記念祭のコメモレイションが盛大に開催されたが、近世までの首都であり伝統的都市であった京都が明治維新と日本の近代化の過程で瀕死の状態に陥り、そこから脱皮するための糸口を見出すための記念祭となった。現代の建都1200年記念祭と明治の遷都千百年記念祭は同型のコメモレイションであるとはいえ、後者は一貫して記念祭という言葉で表現されているので、記念祭という言葉の意味合いについて当時の資料を引用し再検討しておこう。

「記念式ト称スル事ハ我国近代迄ハ未タ聞カサル所ナリシカ近年始メテ行ハレタリ、旧ヲ懐ヒ源ヲ尋子(ネ)テ永ク忘レサルヲ旨トスル最モ緊要ノ式ト謂フヘシ、況ンヤ我平安京遷都千百年記念祭ハ其事最モ重大ニシテ皇室ニ関シ帝都ニ係レルヲヤ故ニ發起以来其事ニ関スルモノハ論ナク、苟モ此挙ヲ賛スルモノ相共ニ心ヲ竭シカヲ致シコレヲ計画セリ、記念式ハ記念祭トハ自カラ別ニシテ記念祭ハ専ラ桓武天皇ヲ奉祭シ其盛徳ヲ顕シ洪恩ニ報ユルニ在リ、記念式ハ上下相会シ以テ千百年ノ名京ヲ祝シ仰テ延暦ノ洪謨ヲ欽シ近ク明治

ノ昭代ヲ慶シ以テ益々此京ノ隆盛ヲ祈ルニ在リ……」(京都市参事会『平安遷都紀念祭紀事』、80頁)。

この文書が掲載されている『平安遷都紀念祭紀事』は、紀念祭の主催者となった京都市参事会が明治29年に編纂し刊行した文献であり、他にも貴重な文書が多数収録されている。参事会は、明治22年(1889)に公布された「市制中東京市京都市大阪市ニ特例ヲ設クルノ件」に基づき東京、京都、大阪の三市だけに設置された特権的な都市政府であり、三つの特例市には通常の市長や市会は存在せず、当該市域の府知事や書記官や名誉職参事会員たちが直接参事会を運営した。しかしながら、十年ほど後の明治31年(1898)に「市制特例」が廃止されると同時に参事会もなくなり、全国共通の市制へと移行した。明治22年から31年まで京都府知事が直接指導した京都市参事会という特権的な都市政府が、紀念祭の第三者的団体として設立された協賛会や明治政府と連携しながら明治28年の一連の大イベントを実施した。『平安遷都紀念祭紀事』は、大イベントを成し遂げた京都市参事会の自負と喜びが表現されている資料であり、引用した文書は、京都市が史上初めて〈都市の紀念祭と紀念式〉と呼ばれるコメモレイションを実践したことを誇らしげに語っている。京都の誕生日を祝い、誕生に尽力した桓武天皇の恩に感謝し報恩の気持ちを忘れないようにし、同時に今後の京都と日本全体の発展を祈ることが紀念式と紀念祭の趣旨とされている。京都が近代都市へと飛躍するモメントとなった平安遷都千百年(1100年)紀念祭の詳細については、後述することにし、建都1200年紀念祭の多種多様なイベントと事業に目を向けてみよう。

平成6年には年間を通して多くのイベントが行われたが、平安建都1200年紀念協会が設立された昭和60年(1985)から同様の数多くのイベントが実施されてきたし、平成7年(1995)以降もしばらくは紀念祭のイベントは続けられた。ふだんならば見られないような記念の式典、学術的なシンポジウム、音楽のメモリアル・コンサート、記念の美術展など、実に多様なイベントが行われた。それらは、(株)ジェイコム編『京都1200 公式ガイドブック』と『公式記録 平安建都1200年記念事業史』(いずれも(財)平安建都1200年記念協会)に掲載されている。頂点となるイベントは、平成6年11月6日の京都まつりと11月8日の記念式典であろう。前者は、御池通で行われた1万人規模の都大路パレードであり、京都三大祭(葵祭・祇園祭・時代祭)の行列や巡行とは異なり、いろいろな要素を織り混ぜた文字通り〈総合パレード〉であった。後者の記念式典は、国立京都国際会館で開催され、フォーマルな形で天皇陛下御夫妻が出席されたイベントであり、〈桓武天皇による平安遷都または平安建都の1200年紀念祭〉にふさわしい公式の行事となった。京都は近代以降日本の首都ではないが、江戸時代の天皇の住まいであった御所があり明治以後も天皇の即位式が挙行され、皇室ゆかりの史跡もかなり残っているから、天皇が臨席してこそ〈遷都=建都紀念祭〉も都(みやこ)のコメモレイションとしての意義があるのではなからうか。頂点のパレードと記念式典を支える数多くの学術的なシンポジウムも実施され、平安京と京都の歴史的歩みを総括し、未来に向かってのメッセージを発信した。平安京と京都の集合的記憶は例えば歴史書の形で整理・保存されて伝承されていくと同時に、

シンポジウムという儀式を通じて創造的に再生され、次の時代に活用されるための情報として伝えられることも多い。シンポジウムは現代の再帰的社会における〈再帰性 (reflexivity)〉と〈記念・顕彰行為 (commemoration)〉のメカニズムを象徴するイベントであろう。

ソフトな記念事業だけでなく、多数のハードな記念事業も実施されたし、今でも継続されている。1200年記念協会の『公式記録 平安建都1200年記念事業史』(5頁)には、平成6年(1994年)の前後各10年間において実施される、次のような多種多様な事業が列挙されている。1. 新しいまちづくり(京都駅の改築や梅小路公園の建設など)、2. 交通・情報通信網の整備(地下鉄の整備や京都縦貫自動車道の建設など)、3. 産業の振興(京都市リサーチパークの建設や京都経済センターの建設など)、4. 生活環境と地域社会の整備(京都府民総合交流センターの建設など)、5. 文化の継承・発展(京都コンサートホールや国際日本文化研究センターや京都文化博物館などの建設)。千二百年の都市の伝統を創造的継承するとともに、新しい時代の京都を切り開く基礎的な事業であり、約百年前に近代都市の建設のために構想され実施された三大事業(第二琵琶湖疎水・水道・道路拡築=電気軌道敷設)等と対比できるものである。京都の集合的記憶を創造的に再生し、新しい形に具象化しようとするものといえよう。平安建都1200年記念祭が果たして成功したのかどうかに関しては、結論を出すまでにはまだ時間が必要であり、また百年後の1300年記念祭の時は現代の記念祭に対してどのような意義と位置づけが与えられるのかも大変に気になるところである。記念祭の成否の結論を出すことはできないにしても、2005年の現時点でいえば、十年間の1~5の事業によって、古都であり近現代都市でもある京都に新しい要素が加わり、いっそう歴史的厚みが増したように考えられる。

今後も平安建都1200年記念祭の多種多様な事業の成果、そして次の段階への飛躍をじっくりと見つめていくことにして、コモレイション研究の立場から建都1200年記念祭の総括をしておこう。ピエール・ノラ編『記憶の場』では、19世紀末に行われたフランス革命百年祭と、1980年代に試みられたフランス革命二百年祭がいろいろな角度から論述されており、好対照な経過と結果が指摘されている。第三共和制の力強いナショナリズムがフランス革命百年祭を牽引し大変な政治的経済的盛り上がりを見せたのに比べ、個人化と国際化が進む平和な現代フランス社会を背景にした二百年祭は中心を欠いたレジャー色の濃い文化イベントになってしまった。京都の1200年記念祭にも同様の傾向が見出されるかもしれない。富国強兵と殖産興業の道をひた走る明治時代の日本でもナショナリズムの強い求心力が発生したため、その磁場に引き寄せられる形で平安遷都千百年記念祭が行われ、京都市全体が大変な熱狂に包まれた。それに比べ、個人化とグローバル化が進んでいるだけでなく地方分権化が叫ばれている現代の日本の社会では、ローカリズムを引き寄せ後押しするナショナリズムの強い磁場が生まれなため、京都の記念祭も百年前のような求心力も形成されないまま終了したように見える。本稿の「おわりに」でローカリズム、ナショナリズム、グローバルリズムの関連をごく簡単に再検討するつもりであるが、ナショナリズムに重ねあわされて活況を呈するコモレイションが決してベターであるとはいえないし、逆に求心力のない、レジャー色の濃いコモレイションが悪いともいえない。評価する価値観の取り方しだいで評価も変わる。

それでは、明治政府が主催した内国勸業博覧会と連携する形で行われた百年前の平安遷都千百年記念祭は現代の建都1200年記念祭とどこが違うのだろうか。次の2からは順次、第4回内国勸業博覧会、平安遷都（奠都）千百年記念祭、平安神宮と時代祭を取り上げてみよう。

2 明治28年の第4回内国勸業博覧会と京都の〈変貌〉

現在の日本には、何らかの形で時代祭という言葉が付けた祭りは全国各地に見られるが、それらの先駆けとなったのはやはり京都市の時代祭であろう。京都市の時代祭は今は平安神宮の大祭として10月22日に実施されている年中行事あり、春の賀茂大社の葵祭と夏の八坂神社の祇園祭とともに京都の三大祭の一つになっている。葵祭と祇園祭は古代の平安京の頃から千年余り続いている日本を代表する伝統的な祭りであるのに対し、時代祭は明治28年（1895）の平安遷都記念祭から始まった、比較的新しい年中行事である。19世紀末の平安神宮の創建と時代祭の実施という出来事は、現在の京都市岡崎公園における第4回内国勸業博覧会の開催や京鶴鉄道の建設とセットになった大イベントであり、京都という一つの都市が近代都市へ変化する過程にとどまらず、日本の近代国家の形成という社会全体の変動過程をも象徴する重要な歴史的現象である。そこで、平安神宮と時代祭を生み出した第4回内国勸業博覧会に関して、コメントの歴史社会学の観点から再検討してみよう。

明治維新により日本の首都は京都から東京へと変わり、千年余り続いた京の都は一地方都市になってしまい、当然のことながら、いろいろな面での〈地盤沈下〉が顕在化してきた。幕藩体制から近代国家体制への変動過程では多くの城下町が程度の差こそあれ同様の〈地盤沈下〉に直面したけれども、他の伝統的な都市とは異なり京都の場合は首都機能の喪失という重大な危機に見舞われた。都市の危機に直面した京都は、地元の政治・経済・教育・文化など各分野のリーダーが中心となって明治前半から、日本の近代国家建設に適合する近代的都市建設政策を次々と考案し実践し、新しい近代都市への脱皮と飛躍を図っていく。そのような都市の危機対応策と建設政策の一環として打ち出されたのが、内国勸業博覧会と平安遷都千百年記念祭の開催というプランであった。結果としては、明治28年に第4回内国勸業博覧会の開催、平安遷都千百年記念祭、平安神宮の創建、時代祭の創始、京鶴鉄道の建設がセットになった一連の事業として行われ、京都が近代都市へと発展する歴史的な大イベントとなった。この歴史的な大イベントに関しては、多数の当時の関連資料、およびいくつかの優れた先行研究があるので、それらを参照しながら経過と結果を概観していこう。

最初から政治・経済・宗教・文化という異なる分野にまたがる、複数の事業が計画されたわけではなく、東京で開催されていた内国勸業博覧会を誘致することが早い時期に京都のリーダーたちのプランとして浮かび上がってきた。明治16年（1883）に京都商工会議所が建議し、地元の政官界が大阪や神戸などの関西各地域のリーダーたちと協議を重ねながら、粘り強く中央の政官界に京都開催プランを申請した。内国勸業博覧会の開催プランを協議していく過程で、明治25年（1892）5月、京都実業協会は臨時総会で「桓武天皇遷都一千百年祭」を建議し、「明治27年第4回勸業博覧会の京都開催」とセットで京都市参事会に提出した。このようにし

て建議から約10年後の明治26年（1893）4月4日、「第4回内国勸業博覧会を明治28年4月1日から7月31日まで京都市上京区岡崎町に開催す」という「勅令第16号」が公布された。この博覧会に関しては、藤原正人編『明治前期産業発達史資料勸業博覧会資料 第62巻』（明治文献資料刊行会、昭和48年）、第四回内国勸業博覧会事務局編『第四回内国勸業博覧会事務報告』（明治29年）、大阪府内務部第五課『第四回内国勸業博覧会報告書』（明治29年3月）などの資料において開催に至るまでの経緯、博覧会の趣旨と内容、および博覧会の実績と成果が詳細に報告されている。それらの事後的にまとめられた報告書を裏づける資料としては、明治時代になって日本にも現れた、出来事をそのつど「客観的に伝えた近代的新聞」がある。特に地元京都の日出新聞（後の京都新聞）と大阪の大阪朝日新聞が逐一かなりの紙面を使って〈博覧会のプロセスと出来事〉を詳しく伝えている。ここでは先ず、博覧会の開催の経緯と趣旨、ならびに管理運営組織を表している報告書の資料（2点）を取り上げておこう。

「○沿革 内国勸業博覧会ハ実業ヲ奨励シ生産ヲ振作シ以テ国家富強ノ源ヲ培養スルヲ期シ其正鵠ヲ愆ラサシメンカ為メ明治十年其第一回ヲ開設セラレ同年太政官布告第八十八号ヲ以テ爾後五ヶ年日毎ニ之ヲ開設スルモノト定メラレタリ……第四回ハ之ヲ京都ニ開設セラルルハ一ハ関西地方ノ輿望ヲ容レラレシト一ハ京都ノ地タル旧帝都ニシテ古来工業隆盛殊ニ本邦美術ノ淵藪タルニ由レバナリ然ルニ二十八年ハ 桓武天皇延暦十三年都ヲ山背国ニ遷シ大極殿ニ御シ受朝アラセラレタル佳辰ヨリ一千一百年ニ相当スルヲ以テ京都ノ民望ニ副ヒ為メニ之ヲ二十八年ニ繰上ケ開設ノ儀二十五年九月二十八日閣議ニ於テ決定シ尋テ第四回帝国議會ノ協賛ヲ経タリ依テ二十六年勅令第十六号ヲ発セラレ明治二十八年四月一日ヨリ同年七月三十一日マテ京都市上京区岡崎町ニ第四回内国勸業博覧会ノ開設ヲ見ルニ至レリ」（藤原正人編『明治前期産業発達史資料勸業博覧会資料 第62巻』、1～2頁）。

「○職制 第四回内国勸業博覧会事務局官制（二十六年四月四日勅令第十七号）

第一条 第四回内国勸業博覧会事務局ハ明治二十八年京都市ニ開設スヘキ博覧会ニ関スル一切ノ事務ヲ管理ス 本局ハ農商務省中ニ之ヲ置ク……（第六条の後）京都本局出張所……告示第九号ヲ以テ二十七年十一月一日ヨリ出張所ヲ博覧会場所在地ニ設置シ必要ノ職員ヲ派出シ……」（同書、3～10頁）。

この最初の資料は、第4回内国勸業博覧会事務局官長の金子堅太郎が明治29年3月29日付けで博覧会副総裁の榎本武揚に宛てた分厚い報告書の書き出しの文章である。2番目の資料は内国勸業博覧会の管理運営の仕組みを条文の形で説明している。京都市で開催された博覧会とはいえ、富国強兵と近代化の政策を掲げた明治国家が国の威信をかけた大イベントでもあったから、農商務省に大がかりな事務局が設置されて準備が進められた。明治28年に京都で開催することに決まった背景については、報告書においても詳しく説明されているが、政府側としては、明治27年、シカゴ万国博覧会が開催され日本も参加し多様な物品を出展し、その事後処理や報告に時間がかかるため、二年ほど間をあけて明治29年に第4回内国博覧会を開催する予定にしていた。それに対し、京都では、桓武天皇遷都千百年に当たる明治27年（1994年）に盛大な紀

念祭を計画していたが、政府側の事情を考慮し、桓武天皇の遷都が事実上完了してから千百年に当たる明治28年（1895年）に開催する案に変更した。このように、双方がお互いの事情を考慮しながら、折り合いを付けて「明治28年開催」に決定された。元々内国勸業博覧会は明治10年（1877）から富国強兵と殖産興業を目的として東京の上野で開催され、引き続き第2回（明治14年）と第3回（明治23年）も同じ上野で実施されたが、京都市が地方の興隆と千年の都といった独自性などを熱心にアピールして誘致にこぎつけた。

博覧会は予定通り明治28年4月1日から7月31日まで開催されたわけであるが、京都の日出新聞と大阪の朝日新聞は、ほとんど毎日のように博覧会彙報や博覧会案内記などの記事（時には図表入り）を掲載して博覧会の宣伝をすると同時に、期間中の様子や出来事を事細かに伝えている。また、いろいろな立場の人々の評論や論説も掲載している。おびただしい量の記事があるが、ここで博覧会が始まる頃と終わる頃の様子について伝えた記事（2編）だけ取り上げておこう。

「●博覧会彙報 来る一日は開会式挙行後に一般観覧人を入場せしむる筈なるが多分午後早々より入場せしむる事となるべし▲開会式参列員の中審査官に限り通常礼服用を要せず羽織袴にて苦しからず由……▲器械館の陳列は前報後余り抄取らず未だ搬入せざる府県過半あり右は搬入の上据付に多少の時間を要するに斯くの如き有様にては開会当日までに陳列し終る事能はずとて昨日より出品人を促がし大に搬入据付けを急ぎつつある由▲開会式場及び音楽室は此の程より装飾中なりしが全く整備したる由……▲会場内なる飲食店休憩所等の工事は此程より連日の降雨にて塗壁乾かず意外に延引せし向きもありしが昨今両日中には総計二十余店孰れも工事落成を告げ明三十一日中には内部の装飾を成し開場当日より開店の準備を成す……（その他のパビリオンの様子）……▲水族館前に新築せし水族分館内部の工事は全く成工せしを以て明後日各種の水族を放養する筈なり」と（『日出新聞』明治28年3月30日）。

「●博覧会閉場式 一昨日の博覧会閉場式の模様は既に前号欄外に記せしが尚ほ漏れたるものもある可ければ更に其詳細を掲げむに当日午後五時二十分を以て其式を挙げらるる筈なりしが三時過ぎより降出したる夕立の四時過ぐる頃まで晴天なかりし為め参列諸員の着場如何なるべきと思ひけるに四時三十分頃より孰れも大礼服又は通常礼服用を着し漸次着場して小松総裁宮殿下の御臨場を御待合せまいらせけるに殿下には五時過ぐる頃御馬車にて御着あらせられたり……九鬼（審査）総長の御先導にて軍楽隊の奏楽声裡に式場に臨ませられ設けの御坐到に着かせらるるや金子（堅太郎博覧会）事務官長は御前に進みて左の演述あり……（他に小松宮彰仁親王と渡辺千秋京都府知事の言葉）……是れにて式全く了はりを告げらるれば殿下には再び九鬼総長の御先導にて御休憩所に入らせられ少時御休憩茶菓の饗応を受けさせられ同六時頃旅館に御帰館あらせられしが来会諸員には式後美術館後の仮屋に於て麦酒茶菓の饗応あり六時半頃何れも帰途に就けり」（『日出新聞』明治28年8月2日）。

最初の引用文は、博覧会が始まる直前の準備状況を伝えている記事であり、そこから式場やパビリオンや休憩・飲食施設がそれぞれの事情によって準備万端のところもあれば、まだ作業中のところもある、といった様子が伺える。なかなか興味深い内容であり、現代の日本では当たり前となっている〈時間厳守と準備万端の近代的 방식〉とは異なる、いわば〈発展途上国並みのルーズな準備方式〉が浮き彫りにされている。博覧会は京都で開催され、実質的には京都府・市が運営した部分が多かったとはいえ、明治政府が主催した国家的イベントであり、博覧会事務局も中央官庁内に設置されていた。明治28年頃は、日本と京都の本格的な近代化はまだ始まったばかりであり、近代以前の生活と仕事の感覚が中央政府部内だけでなく社会全体に色濃く残っていたのだろう。二番目の引用文は、博覧会の最終日の7月31日における閉会式の様子を書き記している記事であり、そこからは真夏にありがちな夕立のため参列者と来賓が苦慮している姿が想像される。金子事務官長の締めくくりの挨拶では、ところによっては準備が遅れたこと、あるいは思い通り進まなかったことが述べられているが、概ね予定通り成功裡に終了したことが強調されているとともに、今後の殖産興業と近代化の更なる発展が期待されている。日出新聞と大阪朝日新聞には、博覧会期間中のいろいろな出来事やエピソードがそのつど掲載されており、博覧会に反映された当時の悲喜こもごもの世相が感じられる。紙幅の都合上今回は割愛するが、いずれ機会を改めて「新聞を通して見た博覧会」について詳しく取り上げてみたい。

博覧会終了後、事務局は既述のような報告書を作成している。この第4回内国勸業博覧会の報告書は、沿革の他に次のような項目に分けて大イベントの詳細を400頁余りにわたって記述している。職制、公文、儀式、行幸啓、会場、会場内外設備及取締、出品、監査、審査、褒賞、売店、経費、収入、物品、地方税出品補助、諸規則、図類。これらの中で特に注目したいのが博覧会の会場であり、模造大極殿（遷都千百年記念祭の記念殿、後の平安神宮）、工業館、美術館、農林館、動物館、水産館、機械館などが京都市の岡崎地区に建設された。岡崎地区は江戸時代までは都の中心部から離れた周辺地域であり〈未開発地域〉であったけれども、明治期における京都市の近代化の三大事業である琵琶湖疎水建設計画を契機に注目されるようになり、博覧会にふさわしい場所として選ばれた。内国勸業博覧会という、明治国家の重要なイベントのために岡崎地区は多額の費用を使って開発され、京都市の新しい経済・文化的機能を担うようになる。現在では岡崎公園と呼ばれる〈第4回内国勸業博覧会会場〉の跡地には、平安神宮、京都会館、府立図書館、国立近代美術館、市立美術館、勸業館、動物園などが建ち並んでいるが、それらは内国勸業博覧会のパビリオンを継承する形で大正4年（1915）の大典記念京都博覧会と昭和3年（1928）の大礼記念京都大博覧会などの博覧会を契機に整備拡大されてきた建物群である。大正天皇と昭和天皇の即位式は京都御所で挙行され、その記念祭が岡崎地区でも盛大に行われた。岡崎地区は京都の博覧会とコモレイション（記念・顕彰行為）の儀礼には欠かせない場となったわけである。

新しい経済・文化的地域の形成と同時に、明治28年の内国勸業博覧会は京都にどのような、あるいはどれほどの経済的効果をもたらしたのだろうか。数字では簡単には把握できないし、

長期的な過程を見ていかないときちんとした評価・判断はできないが、差し当たり松田京子『帝国の視線』や『第四回内国勸業博覧会事務報告』などを参考にしながら、東京と大阪の内国勸業博覧会と比較する形で直接的な経済効果を示す大ざっぱな数字だけを挙げておこう。富国強兵と殖産興業を目的とする明治国家の内国勸業博覧会は通算5回ほど実施されており、第1回（明治10年）、2回（明治14年）、3回（明治23年）は東京市の上野地区（会場面積約4万坪）で開催された。期間は100日から120日ほどであり、来観者数はそれぞれ約45万人、82万人、100万人、出品点数は約8万4千点、33万点、16万7千点、出品人数は約1万7千人、3万人、7万7千人、経費は約10万7千円、27万6千円、48万6千円であった。第4回（明治28年）は京都市の岡崎地区（会場面積約5万坪）で開催され、期間は122日、来観者数は1136695人、出品点数は約17万点、出品人数は約7万3千人、経費は約38万円であった。第5回（明治36年）は大阪市の天王寺地区（約1万1千坪）で開催され、それぞれ153日間、約530万人、27万7千点、13万人、経費は約100万円であった。岡崎地区の第4回の博覧会は数字で見ると第3回までの東京上野地区の規模を少し上回る程度であり、第5回の大阪天王寺地区の博覧会よりもかなりスケールの面では劣っていたといわざるを得ない。

ただ、第4回の博覧会は遷都記念祭と一体となって建議され、記念祭の会場や設備としても使用するために準備も進められて実施されたので、先ほどの博覧会経費（事業費）約38万円の他に、共同の土地買収経費約10万4千円と記念祭関連経費（事業費）約38万7千円を総計すると約96万円になる。大正期まで継続した近代都市京都の最大の建設事業の一つ琵琶湖疎水事業費が約125万円であったことを考えると、明治28年におけるコメモレイション関連の総事業費は膨大なものであったと想像できる。博覧会の事業費は国が負担したが、その他の土地買収費と記念祭の事業費については京都市の負担と全国各地からの寄付金が大半を占めていた。後者の収支問題については後述することにして、少なくとも京都市と後背地の規模を考慮すると、莫大な資金を投入し、巨大な社会的経済的効果をもたらした歴史的な大イベントであったと推測できるだろう。

そして、松田京子たちが第5回内国勸業博覧会を事例にして批判的に考察したように、欧米列強の帝国主義的世界分割と植民地支配の競争への仲間入りをもくろむ明治の天皇制国家が主催した第4回の博覧会は、日清戦争と並行して実施されておりアジア諸国に対する植民地支配の始まりを象徴するイベントでもあった。京都に新しい経済・文化地区を生み出した内国勸業博覧会という方式も、大阪の第5回内国勸業博覧会をもって終わりを告げる。それに替わる博覧会方式として、明治45年（1912）に政府主催の〈日本大博覧会〉という名前で日本初の万国博覧会が開催する案が構想された。19世紀後半から20世紀にかけてパリ、ロンドン、ニューヨーク、シカゴ等の欧米の大都市で開催された万国博覧会はそのつど開催都市を近代的に改造する原動力の一つとなった。日本と東京を飛躍させる歴史的な大事業として期待された日本の万国博覧会は、半封建的な農業制度を残す日本の近代資本主義の脆弱な基盤と不安定な経済状況に左右され、財政難などのため「無期限延期」された。その後、昭和15年（1940）に〈紀元二千六百年奉祝記念事業〉として再度東京の万国博覧会とオリンピック大会が企画されたが、こ

れも日中戦争と第二次世界大戦の激化などにより実施されなかった。ようやく昭和40年(1970)に日本初の万国博覧会が大阪で開催され、予想を超える入場者と効果をもたらした日本と大阪の現代的变化のスプリング・ボードとなった。

3 平安遷都(奠都)千百年記念祭の〈紆余曲折〉

中央官庁の中核をなす農商務省に事務局が置かれた内国勸業博覧会は、明治国家が主催する事業であり、政府と連携しながら京都市は誘致して受け皿となる会場を設置・運営する役割を果たした。国家が主催する博覧会に併せる形で実施された平安遷都(奠都)千百年記念祭は、京都市が独自に主催するコメモレイションであった。関連資料としては京都市参事会編『平安遷都記念祭紀事』(上下巻の二分冊)(京都市参事会、明治29年)、若松雅太郎編『平安遷都千百年記念祭協賛誌』(平安遷都千百年記念祭協賛会、明治29年)などがあり、いずれも記念祭終了直後に刊行された詳細な報告書である。なお後者の報告書は、後に『明治後期産業発達史資料 第192~194巻』(1994年復刻版、龍溪書舎)として刊行されている。2でも指摘したように、出来事をそのつど「客観的に伝えた近代的新聞」は記念祭の準備から終了までの過程を逐一追跡する際には非常に有用な資料となる。拙稿「都市の祭りとコメモレイション」において、主に協賛会編『平安遷都千百年記念祭協賛誌』(以下、『記念祭協賛誌』と略す)の諸資料を引用して記念祭の論述をしたので、ここでは参事会編『平安遷都記念祭紀事』(以下、『記念祭紀事』と略す)を軸にして記念祭の諸問題について再検討してみたい。最初に、協賛会の組織と活動、ならびに『記念祭協賛誌』の内容についてまとめておこう。

(1) 平安遷都(奠都)千百年記念祭協賛会と記念祭

先ず、上記の二つの報告書は京都市参事会と平安遷都千百年記念祭協賛会が整理・記述したものであり、それぞれ別々に作成されている。すでに指摘したように、京都市参事会は明治22年から31年まで存在した特権的な都市政府であり、参事会を構成していた京都府知事や書記官や名誉職参事会員たちが、京鶴鉄道建設や京都市の近代化の三大事業と並ぶ大事業として遷都千百年記念祭を主催した。そこに、第三者的団体として設立された記念祭協賛会が加わることによって、歴史的な大事業を遂行するための全国的なネットワークが形成された。第4回内国勸業博覧会の〈制度的主催者〉が明治政府であるとすれば、平安遷都記念祭の〈制度的主催者〉は京都市参事会であり、記念祭協賛会は主催者をサポートする〈制度外の協賛団体〉であった。もちろん、法制度上は支援の協賛団体ではあったが、実際には協賛会の精力的な活動があってこそ記念祭はほぼ予定通り成功裡に終了したといえよう。したがって、参事会の報告書に劣らず『記念祭協賛誌』にも、協賛会と記念祭に関する貴重な文書が数多く収録・掲載されており、記念祭の研究のためには絶対に欠かせない最重要文献の一つである。その『記念祭協賛誌』は、およそ次のような項目に沿って整理されている。

総目 蒼龍篇(創立、職員、地鎮祭、立柱式、御霊代鎮座式、記念大祭、記念章牌、勸盃、功勞、解散式、事務所) 朱雀編(御下賜金、寄附勧誘、会計、寄附金品) 白虎編(模倣大

極殿、平安神宮、建築事務所、神宮装飾、神苑、土地、建築図） 玄武編（汽車汽船賃銭割引、二府八縣聯合事業、平安京図解、出版及廣告、戦利品陳列） 附録（時代祭、平安講社）。

蒼龍、朱雀、白虎、玄武という四神を示す言葉に基づいて整理されている点は、四神相応の風水思想に従って遷都・造営された平安京と平安宮の記念祭の報告書の特色をなすといえよう。『記念祭協賛誌 蒼龍篇』（『明治後期産業発達史資料 第192巻』）の創立の中に記念祭の趣意書（明治25年10月）、協賛会の発起会（同年11月17日祇園中村楼）、および協賛会の設立趣意書（明治26年4月19日）と協賛会規約（同年月日）が収録されているが、設立趣意書と規約の一部を引用しておく。

「恭シク惟ルニ明治廿八年即チ 皇祖 神武天皇建国第二千五百五十五年ハ実ニ 桓武天皇平安京遷都第一千百年ニ当レリ……此年ヲ以テ平安京遷都記念祭ヲ举行シ 桓武天皇ノ洪恩ヲ奉謝シ大ニ 今上天皇ノ隆徳ヲ奉祝シ併セテ京都ノ益旺盛ヲ祈ラントス我等協同賛助セスシテ可ナランヤ是レ本会ヲ設クル所以ナリ且夫レ我国闔境 桓武天皇ノ宏徳大業ヲ欣仰セサルノ臣民無ク而シテ記念祭ハ乃チ主トシテ 天皇ヲ追慕シ奉ルノ大祭ナリ……」（明治26年4月19日「平安遷都千百年記念祭協賛会設立趣意書」）。

「第一条 本会は明治廿八年京都市ニ於テ執行スル 桓武天皇平安遷都千百年記念祭ニ協同シ其事業ヲ賛助スルヲ目的トス 第二条 本会ハ事務所ヲ東京及京都ニ置キ支部ヲ各地方ニ置ク 但支部ニ関スル事務ハ京都事務所ニ於テ処理ス……」（明治26年4月19日「記念祭協賛会規約」）。

これらの二つの文書の年月日に注目したい。明治25年5月25日に京都市会は「第4回内国勸業博覧会誘致の決議」をして、三日後の5月28日に京都市会から河野敏謙農商務大臣宛に決議文を送っている。その後、明治25年8月3日に農商務省の内示（西村捨三農商務次官から千田貞暁京都府知事宛）が出され、その中で明治28年に京都市において第4回内国勸業博覧会を開催し、その次の第5回内国勸業博覧会は大阪市において行うことが記されている。さらに、明治26年4月4日には「勅令第16号」が公布され、「第4回内国勸業博覧会を明治28年4月1日から7月31日まで京都市上京区岡崎町に開設す」と正式に決定し、同日「勅令第17号」（「第4回内国勸業博覧会事務局官制」）が公布されている。内国勸業博覧会の誘致の建議と決議、農商務省などへの具申、それに対する農商務省の博覧会京都開催の内示、博覧会開催の勅令を追いかけるように平安遷都記念祭の趣意書と協賛会設立趣意書・規約が作成されていく。そのような後追いのやり方で進んだのは、京都では博覧会誘致の目玉として千年の都としての平安京＝京都を高く掲げていたから、博覧会開催の政府の認可に併せる形で記念祭を立ち上げる戦略が得策と考えられたためであろう。

記念祭協賛会の組織編成については、引用した設立趣意書と規約の後の「職員」の項目にまとめられている。総裁は有栖川宮熾仁親王殿下（後に小松宮彰仁親王殿下）、会長は公爵の近衛篤麿、副総裁は伯爵の佐野常民であり、設立発起人で式典の接待委員には内貴甚三郎や熊谷直行などが名前を列ねている。総裁以下の職員を支える形で京都市参事会、実業会、商工会議

所、京都府と市の各界のリーダーたちがいろいろなルートを通じて協賛会に關与していた。協賛会の活動の中で特筆すべき事業として〈二府八県連合事業〉がある。『紀念祭協賛誌 玄武編』の「二府八県連合事業」（同書27～33頁）に詳しい記述があるが、明治26年4月、農商務省次官であり博覧会の立役者であった西村捨三が京都府と市のリーダーたちに呼びかけて始められた大がかりな観光キャンペーンを兼ねたネットワークづくりの活動である。大阪府や兵庫県を始めとする近隣の府県（愛知・三重・岐阜・滋賀・香川・岡山・広島）に対して、直接出向いて演説し紀念祭と博覧会への参加・協力をお願いし、必要な資金や情報やモノなどを集めるための活動を展開した。東京に比べ不利な条件下に置かれていた当時の地方都市京都であっても、協賛会とは別個の農商務省という国家組織が運営した博覧会の来観者が110万人を超えたのも、〈二府八県連合事業〉の活動によるところが大であろう。このような地元住民の熱意と努力を基盤とする、全国的ネットワークを形成した協賛会の組織と活動があつてこそ、政府主催の内国勸業博覧会と連携した紀念祭というコメモレイションを実施することができた。

以上、『紀念祭協賛誌』に即して協賛会の組織と活動、ならびに紀念祭についてごく簡単に眺めてみた。次に、平安遷都千百年紀念祭の〈制度的主催者〉である京都市参事会が編纂した『紀念祭紀事』に依拠しながら、紀念祭の諸問題を再検討してみよう。

（2）京都市参事会と平安遷都（奠都）千百年紀念祭

最初に『紀念祭紀事』の編纂の趣旨と内容について触れておこう。冒頭に、紀念祭の理念や趣旨を中心にした山田信道京都府知事の挨拶文と京都市参事会の緒言が掲載され、その次に紀事の編纂の方針を述べた例言が続き、本文は第一章から十八章まであり、その本文の構成はおよそ次のようになっている。

紀念祭成立、事務所委員規定職員、平安神宮創立及大極殿模造、紀念祭、紀念式、編纂事業、平安京全部実測、大極殿遺址建碑、社寺名勝故跡修理保存、社寺及民間紀念祭ニ対スル設計、内外広告、接待及衛生、第四回内国勸業博覧会、土木営繕、協賛会成立、連合府県、経費、雜、略表、以上。

編纂方針を掲げた例言で述べられているように、『紀念祭紀事』を編纂する時点で協賛会の報告書『紀念祭協賛誌』が出来上がっていたため、できるかぎり重複しないように資料や文書を収録しながら紀事がまとめられている。もちろん、紀念祭の本質に関わる各種の趣意書、名簿、基本的な行事、予算・決算書などは絶対に落とせないと判断されたためか再録されて、その前後の事情についても書き留められている。ここで取り上げてみたいのは紀念祭の発端と組織の立ち上げのプロセスであり、それは『紀念祭協賛誌』からは読みとりにくい部分である。既述のように、明治25年5月に京都の実業界の要望などを踏まえ京都市会が「内国勸業博覧会誘致の決議」をして明治政府宛に「決議文」を送り、同年8月3日に農商務省の内示（明治28年京都開催）が千田京都府知事宛に出された。博覧会誘致の決議と内示の動きに合わせる形で京都市会では、平安遷都千百年紀念祭を企画し組織の立ち上げを進めていった。『紀念祭紀事』

の「第二章 事務所委員規定職員」では次のように書かれている。

「明治二十五年五月二十八日市会ニテ紀念祭ノ為メ調査委員ヲ撰任シ参事会ヨリ三人市会ヨリ四人ヲ撰出シ其事ヲ托シタリ其人左ノ如シ……是レ委員ノ始メナリ六月十三日初メテ委員会ヲ府庁ニ開キ内貴甚三郎ヲ互撰シテ委員長トシテ事務ヲ整理セシム、其後九月二十八日市会ニ於テ更ニ紀念祭ヲ市ノ事業トスル事ニ議決セシヲ以テ十月委員連署紀念祭執行旨趣書ヲ内外ニ発行セリ、同二十六年三月六日市会ニ於テ二十八号議案ヲ以テ紀念祭委員ノ章程ヲ議決シ更ニ市制第六十一条ニヨリ臨時委員ヲ置キ其事ニ当ラシム、

二十八号議案 遷都紀念祭委員事務取扱規程

- 一 明治二十八年ニ举行スル 桓武天皇遷都紀念祭ニ係ル事務取扱ノ為市制第六十一条ニヨリ臨時委員十五名ヲ置ク

.....

- 一 紀念祭委員ノ取扱フヘキ事務ノ概要ハ左ノ如シ
- 一 紀念祭举行ニ係ル方法及之レニ付屬スル事業ヲ計画スル事
- 一 第四回内国勸業博覽会ニ充ツヘキ敷地又ハ同会開設ニ關シテ市ノ行フヘキ事業設計ノ事

.....

- 一 紀念祭協賛会ニ關スル事務ノ事

.....

」(京都市参事会『紀念祭紀事』、11頁)。

明治政府が主催する第4回内国勸業博覽会の事務局官制の勅令が公布されたのが明治26年4月4日であり、平安遷都紀念祭の協賛会の設立趣意書と規約は同年4月19日付で作成されている。上記の引用文によると、明治26年3月6日の京都市会で紀念祭委員に関する詳細な事務取扱規程が議決されているから、市側の組織の立ち上げが一番早かったといえよう。紙幅の都合上、割愛したが、『紀念祭紀事』に収録されている「委員規程処務細則及ヒ職員」は五頁余りあり、事務組織と職務、および委員について事細かに記述している。紀念祭委員15名の内訳は、市参事会員3名、市會議員7名、市民5名となっており、委員長の内貴甚三郎は協賛会でも重要な役割を演じていた。この取扱事務規程にも、協賛会に関する事務も取り扱うことが定められている通り、内貴以外の多くの委員が協賛会の重責を兼ねていた。さらに、博覽会の事務も取扱の範囲の中に含まれており、市の紀念祭組織と市外の協賛会は、相互乗り入れ体制のような形でスクラムを組んで紀念祭と博覽会の運営に携わっていたといえよう。

京都における明治28年の一連のコメモレイションの理念や趣旨に関する文書も、『紀念祭紀事』と『紀念祭協賛誌』の両方に収録されているし、二つの報告書の冒頭の挨拶文や緒言等の箇所でも理念や趣旨が説明されている。ここで最も基本的な文書ともいべき紀念祭趣意書を取り上げておこう。

「……爰ニ明治廿八年ハ即チ 桓武天皇延曆十五年正月朔始メテ大極殿ニ御シ正朔ノ拝

賀ヲ受ケサセラレ此平安城ノ規模全備セシ年ヨリ一千一百年ニ相当スル年ナルヲ以テ吾京都市民ハ此年ニ於テ吾平安京遷都千百年紀念祭ヲ執行シ 桓武天皇ノ尊靈ヲ奉祭シ其聖徳ヲ追賛シ其鴻業ヲ瞻仰シ此千百年間ニ於テ發達シタル事業ヲ表彰シ吾日本帝國ノ隆運ヲ賀セントス此ノ如キ大祝祭ハ國家ノ盛典トシテ實ニ全國臣民ノ相共ニ企図計畫スヘキ所ナレドモ吾京都市民カ熱心ニ奮發シテ首唱發企ノ地ニ立ツ者ハ其京輦ニ住シ殊ニ德澤ニ浴スル厚ケレハナリ……」(明治25年10月「平安遷都千百年紀念祭趣意書」)。

この紀念祭趣意書において紀念祭の趣旨や目的が明確な文言で宣言されている。千百年前の延暦14年(794)、新しい都に遷都し平安京や平安宮を造営した、言い換えれば京都の創始者である桓武天皇の偉大な功績と聖徳を称賛し、その限りない恩恵に感謝するためにコメモレイションを実施し、危機に直面する京都市の再生と発展を図ろうとした。同時に、そのコメモレイションの実践を通じて、京都市だけでなく明治の天皇制國家の發展と繁榮を祈願した。都市の誕生日を祝い、都市の創設者の功績と聖徳を讃え、その恩に感謝するという平安遷都紀念祭は、千年余りの都として繁榮してきた京都ならではの独自の祝祭であり、日本の歴史上初めての試みであったのではなかろうか。現代ならば京都に限らず都市の誕生祭と創設者の記念祭は企画し実行できるかもしれないけれども、当時は他の都市が真似のできないコメモレイション・イベントであった。

さて、日本歴史上初の試みともいふべき平安遷都千百年紀念祭はどのような祭典だったのだろうか。祭典の内容については、次の4の平安神宮と時代祭においても触れるので、ここでは紀念大祭の概要だけ述べておこう。遷都の紀念祭は内國勸業博覽会の開催や平安神宮の創建と連携しながら実施され、式典の会場となったのは博覽会場のシンボルともなった昔の平安宮朝堂院の模造大極殿であり、それは後に平安神宮の拝殿として存続し市民の祈りと観光の場となった。『紀念祭紀事』の「第三章 平安神宮創立及大極殿模造」、「第四章 紀念祭」、「第五章 紀念式」では、模造大極殿の地鎮祭、立柱式、御靈代鎮座式、紀念大祭という順序で紀念大祭の準備から終了までの過程が詳述されている。鎮座式までは省略して大祭そのものの概要だけをまとめると次のようになる。

明治28年10月22日午前10時から紀念式(京都市參事會京都府知事山田信道の奏文、明治天皇勅語の傳達(山階宮晃親王)、協賛會總裁小松宮彰仁親王の祝詞(總裁近衛篤磨代讀)、内務大臣(野村靖)祝詞(京都府書記官代讀))、10月23日~24日饗宴(舞樂、競馬、樂隊、能狂言、相撲)、10月25日時代行列(時代祭)、11月9日~15日全市民參拜(約7万5千人)、11月13日~17日紀念踊(市民の祝祭)。

10月22日から実施された紀念大祭の諸行事は、結果的に大成功し、その後も現代に至るまで平安神宮の最大の例大祭として時代祭は10月22日に行われている。ただ、10月22日の紀念大祭の日程は、当初は4月30日に実施される計画が諸般の事情により延期された末に設定されたものであった。『紀念祭協賛誌』や平安神宮の資料では余り言及されていないが、『紀念祭紀事』や地元の日出新聞からは「紀念祭10月22日実施に至るまでの紆余曲折」が読み取れる。後者の

資料や記事によれば、明治27年から28年にかけて日清戦争の大本営が置かれていた広島に明治天皇が長期間滞在していた。原武史『可視化された帝国』の詳細な研究などを参考にすると、明治28年の1月から5月まで明治天皇は広島の本営に滞在していたので、4月30日の記念式に天皇のご臨席を賜りたいという京都市参事会と協賛会の希望があつたけれども、天皇や皇室側の事情で不可能になってしまった。また、明治28年の前半から京都でコレラが流行していたため、京都府は衛生政策や防疫作戦を実施し、7月10日には伝染病を拡大させる恐れのある祭礼を禁止する府令を出した。これらの天皇のご臨席やコレラ流行などの問題に配慮しながら、桓武天皇の平安京遷都にちなむ日を探った末に記念大祭の実施は10月22日に決定された。明治28年夏の祇園祭も延期され、記念大祭と重ならない日取りで何とか10月14日に巡行を終えた。ここで〈記念祭の日程の紆余曲折〉に関連する資料を引用しておこう。

「是ニ於テ大祭日ヲ四月三十日トシ五月一日二日ノ三日ヲ連子テ紀念祭式ヲ執行スル事ニ決シ専ラ其設計ヲ為シタリ、二十八年四月下旬清国和ヲ請ヒ大本営ヲ京都ニ遷サレ天皇皇后兩陛下行幸啓アリ本市ニ於テハ嚮キニ祭日ニ臨幸ヲ請願セシニ幸ニ此ニ御駐輦アルヲ以テ鳳駕奉迎ヲ期セシニ二十八日ニ至リ俄ニ聖上御風氣ニテ三十日ニハ臨幸セラセラレカタキ旨ヲ以テ俄ニ延期トナレリ、因テ更ニ延曆事蹟ニ最モ縁故深キ日ヲ撰定スヘシトテ又其事ヲ編纂部ニ托シタリ、編纂部ニ於テハ左ノ取調案ヲ提出セリ、……（湯本文彦主事名の取調案）……調査ノ結果トシ延曆十二年十月二十二日新京遷御ノ日ヲ以テ大祭式ヲ執行スヘシト議定シ同（五月）二十一日之ヲ市会ニ報告セリ、是ニ於テ紀念祭式ハ来十月二十二日ニ執行シ同二十三日二十四日繼テ紀念祭ヲ執行シ十一月十五日マテヲ紀念祭執行中トシ其期間時々小祭ヲ執行シ十一月八日ニハ特ニ祭事ヲ執行スルコトト定マレリ」（京都市参事会『紀念祭紀事』、56～57頁）。

「●紀念祭彙報 ○協賛会夜会の期日 紀念祭典は 天皇陛下御風氣にて臨幸あらせられざる為め無期延引となり、之と同時に協賛会夜会も延期したるが紀念祭は来六月一日に挙行せん筈にて其筋の内意を伺ふ見込みなるにより協賛会にても夜会を六月一日二日に催さんとの議もあり、昨日午後一時より聖護院旧邸なる同会出張所に於て幹事会を開き此等の件を協議したるに中には本月（五月）三十日に開くべしとの説もありたれど同日は小節気なれば六月一日二日に催ふすとの内決し其筋の内意を伺ひたる上決定することになし又同夜会には紀念祭の招待者を悉皆招待することになしたりと云ふ」（『日出新聞』明治28年5月4日）。

『紀念祭紀事』の引用文には、紀念祭が当初の4月30日から10月22日に変更された経緯がはっきりと書き記されている。4月30日に設定された理由も、引用文の前段に書かれており、『大日本史本紀』等の古い歴史書では延曆12年3月12日（太陽暦4月30日）をもって桓武天皇が新京造営を実行した日と定められていたことに因み、陽暦の4月30日に紀念祭を挙行することにした。明治28年3月15日には平安神宮の御鎮座式も行われ、4月1日から内国勸業博覧会も始まり、広島に滞在していた天皇・皇后兩陛下の御臨幸も内定して紀念祭のお膳立ては整ってい

た。『日出新聞』も、3月からくり返し4月30日の記念祭に関する記事を、例えば記念祭彙報といった見出しで掲載していた。4月23日付の『日出新聞』には、第一面に「●京都行幸」や「●京都行啓」、および「●奉送迎に関する委員会」などの記事が掲載されており、皇后陛下は4月26日に、天皇陛下は同27日に広島をお発ちになり京都に行幸啓されることになっていると報道されている。天皇・皇后両陛下が4月30日の記念祭に御臨幸されるものと、直前まで京都の主催者たちは待ち望んでいた。それが、天皇陛下の突然のご病気により白紙状態になってしまった。その後の主催者たちの対応は、二番目の5月4日付『日出新聞』の記事にも見られるように、試行錯誤の連続になってしまう。中止直後は、5月末とか6月初めに記念祭を再設定する案が出たりしたが、市の委員が中心となって「ふさわしい日」を調査した結果、5月下旬の市会で10月22日に決定された。

約半年ほど延期されて10月22日に举行された記念大祭には、天皇・皇后両陛下は出席されなかったが、山階宮殿下が「勅語 茲に京都市民平安奠都千百年記念式を挙ぐ 朕之を嘉す」を代読した。明治28年10月23日付『日出新聞』は22日の祭典を第一面から大々的に、かつ事細かに報道している。残念ながら秋晴れの下で行われた記念すべき祭典という姿ではなく、「祥雲深く四山を罩め、瑞雨頻りに洒ぐ、天神地祇も亦た此大祭典を祝するの意にやあらむ、我平安遷都千百年の記念祭は、愈昨二十二日を以て举行せられたり」という状況であった。それでも、『日出新聞』や『大阪朝日新聞』によると10月22日から11月までの諸行事は盛大に行われたという。幸か不幸か、現代の京都三大祭のカレンダーを見るかぎり春の葵祭、夏の祇園祭、秋の時代祭という形ではほぼ等間隔で季節を彩る風物詩になっており、4月ではなく10月で良かったように思われる。

平安遷都記念祭の収入と支出に関しては、『記念祭紀事』の「第十七章 経費」と『記念祭協賛誌』の「朱雀編」において報告されている。これらの二つの報告書と『平安神宮百年史本文編』などを参考にしながら、収支決算の注目すべき点だけを取り上げると、総収入は約39万円であり、その大まかな内訳は寄付金約30万円、御下賜金2万7千円、市の交付金2万円、参拝章収入約3万6千円などである。京都府民からの寄付金が最も多いが、東京をはじめ全国各地のいろいろな人や団体からの寄付金が大半を占めており、それらは京都の住民や関係者の募金活動による賜物である。支出は土木費が約19万円であり、そのうち模造大極殿＝記念殿の建築費が約10万5千円で最も大きな支出となっている。記念祭全体の祭典費は約1万5千円であり、建築費に比べればかなり小さな金額である。平安神宮の建物を創建するために50%前後のお金が使われ、しかも神宮維持資金3万円、殿舎保存資金2万円という費目でまとまったお金が充当されている。支出面から見る限り記念祭は平安神宮の創建と維持のコメモレーションであったといえよう。

内国勸業博覧会は4月1日から7月31日までの期間、模造大極殿を中心とする岡崎地区の工業館、美術館、農林館、動物館、水産館、機械館などで開催され、遷都記念祭が行われた10月から11月にかけては全国から出品された展示は取り払われたが、多くの建物はそれぞれの用途に応じて残され〈創造的に再生される〉ことになっていた。記念大祭の期間の前半は、後述す

る平安神宮の祭典と時代祭が挙行されたので、遷都記念祭の式典は平安神宮創建の祝祭と一体となって、博覧会の成果を後世の京都市のスプリング・ボードとして活用する〈京都再生の儀礼〉となった。ここで、明治28年の一連のコメモレイションの儀礼とともに復活した興味深い事例を付け加えておこう。現在の祇園の名物になっている〈鴨川をどり〉は、京都府知事として活躍した榎村正直が明治初期に京都の経済と文化の復興を意図して努力した結果、〈都をどり〉とともに明治5年から始まった舞踊公演である。〈鴨川をどり〉は不況のため明治17年から中断されていたが、明治28年の遷都千百年記念祭と博覧会を契機に公演が再開された。

4 平安神宮と時代祭の文化社会史

国家イベントとしての内国勸業博覧会閉幕後、平安遷都千百年記念祭の祭典は同じ年の秋二カ月間ほど厳粛かつ華やかに挙行され終了したけれども、平安神宮と時代祭という、現代の京都には欠かせない大切な文化的遺産を創造した。日本と京都の近代化の過程で生み落とされた平安神宮と時代祭は、いろいろな意味で興味深い文化的遺産であるから、『記念祭紀事』と『記念祭協賛誌』、および平安神宮の諸資料と研究文献などを参照しながら始まりと変遷について文化社会史的視点から再検討していこう。なお、明治28年前後の日出新聞や後の京都新聞には、その時々時代祭に関する興味深い記事が多数掲載されているし、時代祭は平安講社などの地域住民の支えがあってこそ成り立つものであるが、今回は紙幅の都合上割愛し、機会を改めて「新聞を通して見た時代祭の姿と変遷」や「時代祭と地域社会」について取り上げてみたい。

(1) 平安神宮の創建と時代行列の考案

既述のように、明治26年3月6日の京都市会において「二十八号議案遷都記念祭委員事務取扱規程」が議決され、平安遷都記念祭と内国勸業博覧会の地元組織が立ち上げられた。同年4月4日、「明治28年4月1日から7月31日まで第4回内国勸業博覧会の京都開催」（勅令第16号）と「同事務局官制」（勅令第17号）が公布され、その直後の同年4月19日、京都の各界のリーダーたちによって準備されていた平安遷都千百年記念祭協賛会設立趣意書と規約が議定された。このようにして京都市参事会の記念祭事務組織、農商務商の博覧会事務局、第三者的団体の記念祭協賛会が正式に発足した後、明治26年6月17日、西村捨三協賛会幹事は桓武天皇を奉祀する神社の建設を提案した。同年9月になり、西村提案を受けて佐野常民協賛会副会長は東京と京都の関係方面に向けて「大極殿建設計画ヲ拡張シテ平安神社ト為スノ議」という意見書を提出したが、東京の協賛会委員、京都市の記念祭委員会、京都市参事会、京都市会などの間で佐野の意見書について討議や協議が重ねられた。その結果、明治26年12月から27年1月にかけて次のような京都市会の決議と協賛会関係者の願書が出された。

「来ル明治二十八年本市ニ於テ執行スル平安遷都記念祭ニ際シ、協賛会ニ於テ平安宮ヲ建設シ、之ヲ官社ニ列セラレタルトキハ、該敷地一万六百四十五坪ヲ該会ヘ交附シ、且ツ曩キニ該会ヨリ本会ヘ寄附シタル金貳万円ヲ来ル二十八年度ニ於テ返附スルノ契約ヲナス

モノトス。」(明治26年12月21日「京都市会の決議」平安神宮百年史編纂委員会編『平安神宮百年史本文編』、120頁)。

「本会々員一致協同遷都紀念祭ノ好機ヲ以テ平安神社ヲ建設シ、桓武天皇ノ神靈ヲ鎮祭シ奉リ追慕尊崇ノ微意ヲ表セントス。其經營ノ方法タルヤ模造大極殿ヲ以テ拝殿ニ供シ、新ニ清穆ノ神宮ヲ建設シ、廿八年ヲ期シテ肅雍ノ大祭ヲ挙ケントス。幸ニ微衷ノ存スル所ヲ体悉セラレ、神社創立ノ事ヲ許可セラレン事ヲ請願ス。而シテ、神社敷地トシテハ壹万六百四拾五坪、神社保存費トシテハ金貳万円、既ニ整備セリ。」(明治27年1月13日京都府知事 中井弘宛「平安神宮設立ノ儀ニ付願」(平安神社創立発願総代 近衛篤磨・浜岡光哲・内貴甚三郎) 同書、121頁)。

これらの決議と願書は、紀念祭と博覧会のシンボルともいうべき模造大極殿を、桓武天皇を奉祀する平安神社として拡張・改造し永続化しようとする構想であるが、明治26年頃に突然出てきたプランではない。所功「平安神宮の創建前史」等の研究によると、すでに明治16年1月に岩倉具視が政府に対し「京都御所内桓武天皇神靈奉祀」の建議をし、同年5月には建設計画のための調査を実施し、かなり具体的な「平安神宮(神社)案」を作成していた。もちろん、岩倉は紀念祭と博覧会に関連づけて構想したわけではなく、東京遷都により京都御所が荒廃し京都市自体も衰退していく危機的状況を憂い、かつての桓武天皇の平安宮(平安京ではない)を再現するための軸となるような天皇の神宮(神社)の創建を計画していた。岩倉の構想は彼の死(明治16年7月20日)によって中断してしまい実を結ばなかったけれども、十年後になって再浮上することになった。千年余り前の平安宮(大内裏)は朝堂院、大極殿、内裏、紫宸殿、清凉殿などから構成される壮大な宮城であり、京都御所を改造しても近い形ですら容易に建設できるものではないため、岩倉案のほんの一部が紀念祭と博覧会、ならびに近代都市京都に適合する方式に改められ復活した。協賛会の西村、佐野、近衛、浜岡、内貴たちがどこまで十年前の岩倉構想を踏まえて提案し発願したのか定かでないが、地元の住民たちの力で実現できる計画に作り替えた。

協賛会の関係者たちの熱意と努力が実って、大きな支障もなく平安神宮の創建の願が承認される。すなわち、京都府の「平安神社設立の認可」(明治27年2月10日)、「平安神社社格並ニ神号御下賜願」(近衛篤磨平安神社創立発願総代・平安遷都紀念祭協賛会会長から中井弘京都府知事宛)(明治27年5月31日)、そして天皇による「御下賜願」(官幣大社に列せられんことを願う書)の裁可を経て、内務大臣から「内務省告示第八拾三号」(明治27年7月2日)が京都府知事に達せられる。引用した決議と願書には、平安神宮の敷地と建設費と維持費を準備できたので官幣大社として認可してもらいたいという趣旨の文言が織り込まれていたため、官幣大社に列することを認める天皇の裁可と内務省の告示は期待したとおりの朗報であった。桓武天皇を奉祀する神社を創建する建議や願いが政府によって認可された背景には、近世の幕藩体制崩壊後、近代の天皇制国家の確立に向かう大きな時代的潮流があった。明治初期の神仏分離と神道重視の政策、天皇の忠臣の鑑とされた楠木正成を祀る湊川神社の創建(明治5年)、初

代の天皇と見なされた神武天皇を祀る橿原神宮の創建（明治23年）、明治憲法の発布と皇室典範の発表（明治22年2月12日）などの出来事が平安神宮の創建に関しても有利に作用したものと考えられる。平安京を造営した桓武天皇が偉大な天皇であり京都にとって最重要な歴史上の人物であったとしても、天皇を奉祀する平安神宮を創建するという問題はナショナリズムや軍国主義や戦争などの視点からも再検討されなければならないだろう。ただ、ここでは紙幅の都合上差し控えておきたい。

先ほど引用した文書に出てくる神宮の建物と敷地については、京都府と市がサポートしながら記念祭の模造大極殿と博覧会の跡地を上手に活用する方式にして、他方、建設と管理運営の資金については、国家＝政府に頼らずに地元の住民と関係者が拠出する方式にした。特に後者の資金の問題は平安講社の設立と時代祭の創始と密接に関連しているので、協賛会の報告書から平安講社設立趣意書と西村捨三の時代行列構想に関する文書（2点）を引用し考察してみたい。

「平安講社……（設立の経緯の説明）……平安講社設立趣旨書 当明治廿八年ハ延暦ノ昔 桓武天皇此平安京ヲ御經營被為在テヨリ一千百年ニ相当リ候ニ付 天皇ノ御尊靈奉祀ノ為先年紀念祭協賛会ナルモノヲ組織セラレ種々経営ノ末平安神宮創設ノ義其筋ヘ出願速ニ御採用相成官幣大社被為列茲ニ紀念大祭挙行ノ榮ヲ得タリ然ルニ此協賛会ハ紀念大祭ノ結了ト共ニ解散セラルルモノナレハ今般有志者糾合シ宮殿並ニ神苑ヲ維持保存シ又ハ大祭典ヲ賛助スル為メ茲ニ平安講社ヲ組織スルモノナリ……。平安講社々則 一官幣大社平安神宮ノ大祭及建造物神苑保存ノ為メ信者糾合結社シ平安講社ト名ク 一平安講社ハ京都市内及附近郡村信者ノ結社スルモノトシ左ノ数社ニ分ツ但市内ハ現在ノ学区ニ仍ル……一人毎日壹厘宛千日間出金スルモノヲ正社員トス……（平安講社創立委員と平安講社理事と平安講社正副組長出納係についての説明）……。」（若松雅太郎編『紀念祭協賛誌』、55～58頁）。

「附録 時代祭 発端 ……近衛会長及西村幹事其他諸氏首唱シテ此ノ紀念大祭ノ意ヲ将来ニ繼續セシメン為メ延暦以降千百年間文物制度ノ変更セシ時代ヲ區別シ其ノ当時ノ行装ヲ模出シ以テ時代祭ヲ挙行スルコトヲ市民ニ勸告シ市民モ亦大ニ進テ其ノ好意ヲ迎エ僅々百余日間ヲ以テ之カ考証ヲ遂ケ之カ用具ヲ調エ遂ニ十月廿五日之ヲ実行シ猶永年之ヲ繼續スルコトニナリタリ……今其大略ヲ記シテ附録トナス 明治廿八年六月十七日西村幹事ハ祇園中村楼ニ於テ左ノ談話ヲナセリ……此京都相当、桓武天皇祭相当、他国ノ出来ナイ此ノ紀念祭ニ就キ、千百年前、桓武天皇ヨリ今日ニ至ル迄、大ナル変遷カ有リ升カラ、此文運風俗ノ変遷ヲ時代毎ニ区域シテ、其ノ時代々々ノ行列ヲ行ヒ度ト思ヒ升ス。此ノ時代祭ヲ觀レハ、一目瞭然ノ下ニ千百年間ノ風俗変遷ヲ知ル事ヲ得マスルノミナラス、我国ノ光輝ヲ益々發揚スル事ヲ得ルナラン。如斯事ハ、東京・大阪ニテハ迎テモ行フ事ハ出来マセヌ。」（同書、48～49頁）。

ここに引用した2つの文書はいずれも記念祭と博覧会が挙行された明治28年のものであり、

年月日だけから判断するかぎり平安講社の設立と時代行列の構想が性急に決まり実行されていったように見える。4月30日に予定されていた記念祭は、天皇陛下が急病（御風気＝かぜ）により〈御臨幸〉できなくなったため中止され、5月下旬の京都市会で改めて10月22日に挙行することに決まった。4月30日から10月22日に延期されたことを受けて、その間に平安講社と時代行列（時代祭）がセットになって考案されたのだろうか。もし当初の予定通り4月30日に記念祭が実施されていたなら、平安講社と時代行列（時代祭）はどうなっていたのだろうか。それらは大変に興味深い問題であるが本稿では詮索せずに置いて、2番目の文書は、明治28年6月17日に祇園中村楼における協賛会の会合で西村幹事が行った「時代行列の構想の演説」とその前後の記録である。紙幅の都合上引用しなかった部分も含め演説の趣旨を要約すると、桓武天皇の平安遷都千百年を祝うとともに天皇の功績と聖徳を偲び讃えるために、〈千年余り都であった京都の風俗〉の変遷を表現する時代行列がふさわしいものであり、それは他の地域では真似のできない京都独自の祭礼となるだろう。西村の演説の二日後には時代行列取調委員が選出され、約一ヶ月後の7月21日には委員会が開催されて短期間のうちに行列の具体的な方針と内容がほぼ出来上がっていった。時代行列を一回だけで終わらせずに、平安神宮と同様に永続化させるための計画も練られ、平安講社の設立へと進んだ。1番目の文書は、平安講社の設立の経緯を説明した文章と、設立を宣言した趣意書を盛り込んだものである。明治28年7月に西村協賛会幹事から「平安講社の組織化」が京都市参事会に提案され、それを受けて9月に入り京都市議事堂において渡辺千秋京都府知事が設立の趣旨を演説し承認され、「平安講社社則」が作成され9月10日に発足した。

最初の引用文の後半部にも出てくるように、平安講社は地元の住民の奉仕と資金提供に基づき成り立つものであり、京都市と近隣の町村の住民は1000日間、毎日一厘ずつ出金することによって講社の社員となり、平安神宮と時代行列を支えていくことになった。省略した部分には、地域の学区を基盤とする講社の組織構成と時代行列の担当区域が具体的に説明されており、短期間で見事なまでに神宮と時代行列の永続化の詳細な計画が作成された。組織構成と時代行列の担当の概略だけまとめると、上京と下京を各3社に区分し合計6社とし、それらの社の中で学区と組に区分し、講社の理事と学区の正副組長を選ぶ。時代行列も基本的には6つの行列に区分し、上下京の6社が担当する方式にした。講社の組織は京都市が全国に先がけて打ち出した小学校区制を有効に活用したものであり、近世における京都の町組制度の中で培われた固有の〈自治精神と自治組織〉によって支えられるものであった。

さて、時代行列はどのような形に仕上げられ、記念祭と平安神宮の創建を彩る祝祭として実施されたのだろうか。明治28年3月15日、無事に予定通り完成した模造大極殿において平安神宮鎮座式が挙行され、名実ともに桓武天皇の御霊（神霊）が奉祀する神社となった。同年の4月から7月まで平安神宮の南側一帯に建設された様々なパビリオンで博覧会が開催され、10月22日からは平安遷都千百年記念大祭と多彩な祝祭が行われた。時代行列は遷都記念大祭の祝祭または付け祭りとして10月25日に実施された。時代行列が実施される一週間ほど前の10月18日付けで協賛会編『平安神宮時代祭行列図譜』が、熊谷直行取調委員長と碓井小三郎以下6名の

委員の名前が付記され刊行されている。そこでは一頁ほどの緒言に続いて、第一列延暦文官参朝ノ事、第二列延暦武官出陣ノ事、第三列藤原文官参朝ノ事、第四列城南流鏑馬ノ事、第五列織田公入洛ノ事、第六列徳川城使上洛ノ事という6つの行列の内容について簡潔に説明されている。元々の平安講社区域外の弓箭隊と山国隊を除く、上下京を区割りした平安講社の6社が担当する6つの行列は、短期間のうちに取調委員会による周到な時代考証に基づき考案されたわけである。このプランに則って10月25日に時代祭が無事に挙行されたが、終了後、第一回目の時代行列の様子を描写した『記念祭協賛誌』の報告文を引用しておこう。

「時代祭挙行 明治廿八年十月廿五日時代祭ヲ挙行スル是ヨリ先キ各社分担ノ行列ニ就テハ基ヨリ練習ヲ要スルコト尠カラサルヲ以テ各数回ノ温習ヲナシ当日午前九時ヲ期シテ市会議事堂ニ集合シ各行列ヲ整頓シ同十一時前列ヨリ列外ニ至ル迄漸ヲ逐テ繰出シ先ツ寺町通ニ出テ西ニ折レ二条通ヲ経テ烏丸通ニ出テ南行シテ四条通ニ出テ四条橋ヲ経テ大和大路ヨリ三条街道ニ出テ粟田門前ヨリ新設ノ慶流橋ヲ渡リ旧博覧会場内大通ヲ経テ応天門ニ入り龍尾壇下ニ至リ前列ヨリ第一第二第三列ハ東側ニ整列シ第四第五第六列ハ西側ニ整列ス。須臾ニシテ前列ハ奏楽場ニテ楽ヲ始メニシ第一列ノ三位四位五位六位ノ四人ハ各隨身ヲ従ヘ龍尾壇西階ヨリ登リ西華門ニ至テ隨身ヲ徹シ大極殿ニ昇リ神靈ヲ拝シ神酒ヲ領シ終テ殿ヲ降り東福門ニテ再度隨身ヲ従ヘ龍尾壇東階ヨリ下リ前位置ニ復ス第二列第三列第四列第五列第六列以下弓箭隊山国隊モ皆同式ヲ以テ拝礼シ終テ博覧会場ニ予備セシ休憩所ニ就キ各休憩ノ上帰路ニ就ケリ。……」(若松雅太郎編『記念祭協賛誌』、53～54頁)。

(2) 平安神宮の変遷—官幣大社から宗教法人へ—

創建後の平安神宮は、京都の総社として平安講社を担う地元の住民や関係者の熱意と努力によって支えられると同時に、偉大な桓武天皇を奉斎する官幣大社として日本の天皇制国家の神道を重視する政策という追い風を受けて概ね順調に維持存続するようになっていった。時代行列も第二回目からは時代祭に名称を変更し、逐次新たに行列も加わるようになり、途絶えることなく伝承されていった。時代祭の変遷については後ほど考察することにして、ここでは大正期から昭和期にかけての平安神宮の二つの転機、すなわち孝明天皇の合祀と第二次大戦後の宗教法人化の問題について再検討してみたい。

千年余りの都平安京と平安宮の創設者が桓武天皇であったのに対し、首都としての京都を締めくくる最後の天皇は孝明天皇(1831～1866)であった。京都御所に住まれた最後の孝明天皇を祀る神社を造営しようとする計画や願いは、遷都記念祭協賛会の内貴甚三郎や浜岡光哲等によって明治末期頃から作成されていた。内貴たちの構想はその後立ち消えになってしまうが、孝明天皇崩御五十年余り後、大正9年(1920)に明治天皇と昭憲皇太后を祀る明治神宮が創建された頃から再浮上するようになり、そのような流れの中で京都選出の衆議院議員森田茂たちは、大正14年3月の第54回帝国議会衆議院に「孝明天皇ノ神宮造営ニ関スル建議」を提出し承認された。そして、昭和3年の昭和天皇の御大礼が京都御所で行われたことを受けて、大

海原重義京都府など京都府市民による孝明天皇奉祀運動が展開されていく。昭和3年に孝明天皇御聖徳奉彰会が結成され、昭和11年6月には、三浦周行京都帝大教授が研究を始め徳重浅吉大谷大学教授が引き継ぎ仕上げた『孝明天皇御事績紀』が刊行された。

昭和初期から10年代の京都府市民の孝明天皇奉祀運動を取り巻く国際情勢は風雲急を告げるものであり、日中戦争が激しくなり太平洋戦争に突入する時代であり、日本の天皇制国家が軍国主義・国体至上主義・天皇神格化へと傾斜していった。国民にとっては危機的な状況に直面する時代であるが、その運動にとっては追い風となり、昭和15年（皇紀二千六百年）、京都における紀元二千六百年奉祝記念事業の一環として平安神宮への孝明天皇の合祀という形で実を結ぶ。その間の主な動きを、年代順に箇条書きにしてまとめると次のようになる。

- ・徳富蘇峰「孝明天皇奉祀の日を待つ」（『大阪毎日新聞』昭和12年1月3日）
- ・「孝明天皇ヲ平安神宮ニ奉祀要望ニ関スル意見書」の決議（昭和12年5月11日京都市会の決議、総理大臣・宮内大臣・内務大臣・京都府知事宛に送付する）
- ・孝明天皇奉祀準備委員会の設立（昭和12年8月6日）
- ・「孝明天皇奉祀奉賛会趣意書」（昭和13年3月30日）の作成
- ・「平安神宮奉祀の御沙汰」（「内務省告示第246号」昭和13年5月3日）
- ・孝明天皇奉祀奉賛会発会式（昭和13年5月10日）
- ・『平安神宮』（第一号）（孝明天皇奉祀奉賛会、昭和14年11月4日）の刊行
- ・『平安神宮』（第二号）（孝明天皇奉祀奉賛会、昭和15年10月10日）の刊行
- ・平安神宮東本殿（桓武天皇御霊）遷座祭（昭和15年10月17日～18日）、西本殿（孝明天皇御霊）鎮座祭（昭和15年10月19日）、奉祝祭（同年10月19日～20日）、時代祭（同年10月22日）

ここに列挙した動きは、当時の『平安神宮』（第一号・二号）や京都新聞、および約50年後に書かれた平安神宮百年史編纂委員会編『平安神宮百年史（本文編・年表編）』などを参考にまとめたものである。明治時代の遷都記念祭や内国勸業博覧会の開催、および平安神宮の創建と同様に、地元の住民の熱意と努力が大きな決め手となった。同じ昭和10年代に現れた大規模な橿原神宮拡張事業は天皇神格化と軍国主義へと傾斜していった昭和期前期の天皇制国家が主導するものであったのに対して、孝明天皇奉祀運動は京都府市民による民間主導の合祀事業として進められた。多くの住民や関係者が参加した奉祀運動と奉賛会に後押しされながら、崇敬者総代平井仁兵衛や熊谷直行、京都市共同組合会長川本元三郎、京都市の関係者、加藤直久宮司たちが、内務省神社局長児玉九一、近衛文麿総理、大谷尊由拓務大臣、馬場埜一内務大臣賀屋興宣大蔵大臣などの政府の有力関係者に働きかけた。孝明天皇を祀る新しい神宮を創建する当初の計画は財政的な理由などのために変更され、桓武天皇を祀る平安神宮に合祀する方式に落ち着いた。財政面の問題に関しては、『平安神宮百年史』によると、橿原神宮の拡張事業費は約1600万円であり大半が国費に近い予算になっていたのに比べ、孝明天皇合祀事業費は約200万円でありその9割が民間の寄付金でまかなわれていた。このようにして京都人の民

間主導で合祀事業が実施されたわけであるが、現代に至るまで合祀の形態は維持存続し平安神宮の建物群を特徴づけており、また多種多様な年間行事を織りなしている。まさに、昭和15年に現代の平安神宮の形式と内容がほぼ整備されたと考えられるので、参考までに合祀の構想を宣言した奉祀奉賛会の趣意書と規約を引用しておこう。

「孝明天皇奉祀奉賛会趣意書……孝明天皇ハコノ平安帝京ニ於ケル最終ニ天下ヲ統治シ給ヒ立憲政治ノ基礎ヲ定メ王政復古ノ端緒ヲ開キテ千百年後ニ 桓武天皇ノ鴻業ヲ完成シ給ヒキ。平安神宮ノ神域ハ実ニ 孝明天皇ヲ奉祀スベキ最適ノ靈境ナルベク斯クノ如クシテ 平安神宮ハ愈ソノ名実共ニ完シト謂フベカラム。茲ニ吾人同志相議リテ「孝明天皇奉祀奉賛会」ヲ組織シテ聊カ獻芹ノ微誠ヲ竭サント欲ス。……孝明天皇奉祀奉賛会規約……第二条 本会ハ 孝明天皇ノ御聖徳ヲ欽仰シ其ノ 神靈ヲ官幣大社平安神宮ニ奉祀セラルル事業ヲ翼賛スルヲ以テ目的トス……。」(『平安神宮第一号』、2～4頁)。

この奉賛会の趣意書では、桓武天皇と併せ奉祀するに値する孝明天皇の重要な功績として、平安京の最後の統治者であり王政復古の道を切り開いて桓武天皇の偉業を継承し完成すると同時に、近代の立憲政治の基礎を定めた点が指摘されている。古くから口伝や書物において桓武天皇は名実ともに歴代の天皇の中でも最も偉大な存在として語り継がれてきたのに対し、孝明天皇は、諸法度によって天皇を規制していた徳川幕藩体制の下で日陰の存在に位置づけられて余り語られることもなかった。近年(平成14年)、家近良樹は『孝明天皇と「一会桑」—幕末維新の新視点』において、「孝明天皇が影の薄い存在となった理由と背景」に関して興味深い研究を発表している。家近によると、幕藩体制下の天皇であったこと以外に、孝明天皇の頑固なまでの攘夷主義と予想外の幕藩体制保守主義が、明治政府の文明開化政策＝開国路線、明治維新期の西南雄藩の倒幕史観、および日本のマルクス主義的な維新革命史観にとって好ましくなく不都合でもあった。昭和期に入って日本の政府が国際的に独自の路線を選択し天皇神格化と国体至上主義的ナショナリズムの道を歩み始めるにつれて、孝明天皇に対するかつての逆風は後退し奉祀奉賛運動にとって有利な風が吹くようになった。ただ、孝明天皇が実際にどれほどの存在であったのかに関する学問的判断や政治的歴史的評価は厳密な資料研究を要する問題であるから、これ以上取り上げないことにする。

さて、孝明天皇合祀から五年後の昭和20年8月15日、日本の敗戦と第二次大戦の終戦によって平安神宮に第2の重大な転機が訪れた。アメリカを中心とする連合国軍が昭和20年9月下旬から京都に入り始め、岡崎公園地域にも進駐して文化施設の多くが連合国軍によって接収され、軍の管理下に置かれるようになった。昭和20年12月15日、GHQ(連合国最高司令官総司令部)は「神道指令」(「国家神道、神社神道ニ対する政府ノ保証、支援、保全、監督並ビニ公布ノ廃止ニ関スル件」)を発表したが、この指令を契機として明治以来の国家神道の体制は崩壊し、政教分離に基づく宗教制度へと変化していく。官幣大社であった平安神宮は新しい宗教制度に直面し、何らかの対応と選択を余儀なくされた。『平安神宮百年史』や当時の京都新聞などを参考にしながら、細かい点は省略するが平安神宮と関係者が実践した対応と選択をまと

めておこう。

結果から見ていくと、昭和26年4月3日に成立した「宗教法人法」によって〈官幣大社平安神宮〉から〈宗教法人平安神宮〉へと変化し再生する。そこに至るまでの過程で、神宮の神職や総代、ならびに平安講社の関係者たちの素早い対応と精力的な活動が行われた。まず、昭和20年12月28日の文部省のポツダム勅令第719号「宗教法人令」に対応して、昭和21年6月20日に崇敬者総代等は、「第1章第1条 本神社ハ、桓武天皇・孝明天皇ヲ奉祀シ、淳厚ナル民風ヲ作興シ、以テ世界人類ノ福祉ヲ増進スルヲ目的トス」から始まる「平安神宮規則」を作成した。この「平安神宮規則」を基礎として、昭和26年の「宗教法人法」に沿うために次のような総則を掲げた「宗教法人平安神宮規則」に仕上げた。「本神社は、桓武天皇、孝明天皇を奉斎し、公衆礼拝の施設を備え神社神道に従って、祭祀を行ひ、祭神の神徳をひろめ、本神社を崇敬する者及び神社神道を信奉する者を教化育成し、社会の福祉に寄与し、その他本神社の目的を達成するため財産管理その他の業務を行ふことを目的とする」（同規則第1章総則第3条）。そして、昭和27年9月1日、徳大寺実厚宮司は「宗教法人法」に基づき「宗教法人規則認証申請」を蜷川虎三京都府知事に提出し、同年12月8日に認証され、ここに〈官幣大社平安神宮〉は〈宗教法人平安神宮〉に生まれ変わった。

国家神道的管理から解放された神宮は民間の一独立宗教法人となったわけであるが、『平安神宮百年史』では自主的運営の道を歩むことになった結果、かえって財政状況を含め全体として良くなっていったと記述されている。すなわち、国家の規制から解放され、平安神宮関係者の努力によって、また日本の経済復興を背景とする神前結婚式や神苑拝観料などの収入の増加などによって平安神宮は戦前以上にいろいろな面で（例えば神職数や職員数など）発展しているという。政治的制度的に見ると官幣大社から宗教法人に変わったとはいえ、建物は同じままであり行事もほぼ同じ内容と形式のまま受け継がれ、神宮を支える平安講社と神宮の組織自体も様変わりしたわけではなく維持存続していった。

（3）時代行列から時代祭へ

記念祭の日程変更（4月30日から10月22日への変更）という、予期せぬアクシデントに直面する過程で、10月22日の記念祭に合わせるかのように平安講社と時代行列の構想が急浮上した。そして、性急に決まったとはいえ明治28年10月25日に、平安遷都千百年記念祭の開催と平安神宮の創建を祝い彩る付け祭りとして時代行列が、京都の中心にある京都市議事堂から市街地を練り歩き、内国勧業博覧会場となった岡崎地区の平安神宮の模造大極殿まで巡行した。当時の新聞には、いろいろな立場と文言で時代行列の様子を伝える記事が掲載されたが、賛否両論あったとはいえ概ね評判は良く、行列の時代考証の細かい点については疑問や批判があり、その後少しずつ改善されていった。今回限りで時代行列は止めるべきであるといった厳しい意見はほとんど出なかったようである。元々、記念祭の〈紆余曲折の副産物〉のような形で、京都でなければできない独自の行事として考案され、また平安神宮と平安講社の重要な祭礼として継続すべきものと見なされていた。その際に、第2回目からは単なる時代行列ではなく、桓

武天皇の神霊の渡御という意味を持たせるべきであるという意見が神宮と講社の関係者の会合で出され、その方針に基づき、かつ平安遷都の日にちなんだ大祭として〈10月22日の時代祭〉に定められた。

明治29年10月22日、平安神宮の大祭として時代祭は実施され、その後は日本の重大な戦争や出来事が起きた非常時を除けば中断することなく継続されている。いろいろな批判や意見や要望を採り入れながら、時代祭は少しずつ変化してきた。まず、第2回目から神輿や神職や神馬の渡御、つまり神幸の要素が加わり、行列の順序に関しても、延暦文官参朝列が先頭で順に新しい時代の列になる方式は、明治維新期の山国隊が先頭で順に古い時代の列になる方式へと全く正反対の形に変更された。なぜ古い時代からではなく、新しい時代から行列を編成するのか、近代優先や維新重視などのそれなりの理由や根拠はあるにせよ、問いつめたら絶対的な理由や根拠はなくなるかもしれない。ともかくも行列の順番は現代に至るまで同じである。行列の増加と変更は随時行われたので、主なものを列挙しておこう。「維新勤王隊列」の増加（大正10年（1921））、「楠公上洛列」と「豊公参朝列」の増加（昭和6年（1931））、「桃山時代婦人列」と「鎌倉時代婦人列」と「藤原時代婦人列」の増加（昭和25年（1950））、「江戸時代婦人列」と「中世時代婦人列」と「平安時代婦人列」への変更（昭和28年（1953））、「白川女献花列」の増加（昭和43年）、「幕末志士列」の増加（昭和45年）など。

大正期から昭和初期にかけて加わった「維新勤王隊列」と「楠公上洛列」は、戦前の天皇制国家のナショナリズムが強くなっていった時代状況を反映しているのだろうか。「楠公上洛列」の新設は、後醍醐天皇の勅命を守り通して自決していった「忠臣楠木正成」を記念・顕彰するものであり、明治初期の湊川神社の創建に連なる出来事といえるかもしれない。「維新勤王隊列」は、文字通り幕末から明治維新期にかけて王政復古と維新のために貢献した志士たちを記念・顕彰する行列である。もちろん、尊王（尊皇）と王政復古と維新の視点は時代行列の最初の構想から受け継がれてきたものであり、すべての行列が名称の変更などはあっても戦後も廃止されずに存続しているから、単純に天皇制とナショナリズムに志向した行列と決めつけることはできないだろう。

戦後になって登場した「桃山時代婦人列」と「鎌倉時代婦人列」と「藤原時代婦人列」は、新憲法と民主主義における男女同権の考えを象徴している行列である。年齢性別を問わず京都市民全体によって支えられる平安神宮と平安講社であると宣言したいのなら、女性の時代行列を参加させなければならない。その意味では、戦前の時代祭は男性中心の半封建的な色彩を帯びていたといわざるをえないだろう。その他には、例えば孝明天皇百年祭や明治維新百年祭などを契機として「幕末志士列」などが付け加わえられたりした。平安神宮百年祭と建都1200年記念に際して刊行された『時代装束—時代祭資料集成—』において時代祭行列、時代祭行列装束、時代祭年表、時代祭の編成と順路などが細部にわたって記述されており、時代祭を末長く後世に伝えてゆくための資料集成となっている。この資料集成の時代祭年表（同書220～222頁）には行列の増加と変更、行列の中止（平安神宮の神事は挙行されるも）、平安講社の組織構成と担当区域の変更、神幸の順路の変更などが細かく記録されている。それを見ると、昭和6年

(1931)に「祭列の拡張に伴ない行列員の集合場所も議事堂前から京都御苑内へと移動する」と書かれており、現在のような御所から平安神宮に神幸する順路が定まった。ただ、途中の順路はその後もたびたび変更されている。

19世紀末に京都の人々が考案した時代行列は、古くからの有名寺社の祭りと行事が溢れていた京都でも当初から異色のイベントとして認知され、葵祭と祇園祭とともに〈京都三大祭〉の一つに数えられるようになった。葵祭は、国家が主催する古代平安京最大の官祭であり首都を鎮護する初夏の神事であった。祇園祭は、平安京の共同体と住民の生活を悪疫から守る神々の祭礼であり、都の町衆が支える真夏の行事として発展していった。それら二つの伝統的な祭礼に対して、京都が首都の地位を東京に明け渡した後に始まった時代祭は、平安京と京都にゆかりの深い二人の天皇を奉祀する新設の神宮のコメモレイション行事として伝承されている。近代化する過程で京都が創造した時代祭は明治以降、近現代日本の時代行列のモデルとなり、城下町として栄えた地域を中心にそれぞれ工夫を凝らした地域固有の時代行列が次々と生まれた。もちろん、千年余りも大都市として繁栄した地域は他にはないので、京都の時代行列ほどスケールが大きく多彩な行列は見られない。それは千年余り都であった京都の文化遺産の豊かさを象徴しているコメモレイションである。

おわりに—京都のコメモレイションと現代社会—

これまで論述してきた建都1200年記念祭、平安遷都千百年記念祭と第4回内国勲業博覧会、および平安神宮の創建と時代祭は内容や時代は異なるが、いずれも京都市が実施してきたコメモレイション（記念・顕彰行為）の大イベントであり、近現代社会固有の歴史意識と再帰的意識を表している。近現代の京都の危機的状況や重大な転換期において、京都は自己の誕生や創設からの歴史を振り返り、未来に向けての再生や発展の立場から過去の必要不可欠な（と評価した）要素を選び出し、功績を讃えたり祝ったりしながら後世に何らかの形で伝えてゆこうと試みた。19世紀末の遷都千百年祭と博覧会は平安神宮と岡崎地区という、現代の京都にとっても最も重要な文化的経済的領域を生み出した点で、近代の三大事業にも劣らない影響を及ぼしており、その時だけで完結する一過性のコメモレイションとはまったく異なるものであった。誰か（ヒト）を、あるいは何らかの出来事やモノを記念・顕彰する行為において問題となるのは、コメモレイションの立場やまなざしが時代の状況により変化する点であり、それぞれの時代に応じてどのような立場やまなざしからコメモレイションが構想され実践され、どのような結果がもたらされたかという点である。また、記念・顕彰行為をめぐる諸問題を考察する立場やまなざし自体も問われなければならないだろう。

本稿は、21世紀初めの世界と日本の情勢を踏まえて論点を設定し、京都市のコメモレイションを再検討しようと試みた。ここで、本稿が想定している現代の京都を取り巻く社会的情勢を簡単に述べておきたい。1980年代以降、高度なメディアの発達などを背景として情報・モノ・人の国際的な交流が飛躍的に活発になり拡大してきている。中国では改革・開放政策が進められると同時に、旧ソ連と社会主義圏の崩壊によってベルリンの壁が撤去されて東西の冷戦も終

結し、EUに見られるような国家を越えた連合や統合が進んでいる地域もあり、いわゆる市場経済が主導するグローバリゼーションがますます進行している。その反面、旧社会主義圏における民族対立が顕在化し、近年ではアメリカの超大国主義的政策によって中東などにおいて戦争状態が激化している。そのような国際情勢の中で国家の枠組みや民族の価値観を重視するナショナリズムの動きも活発になりつつある。実はアメリカの市場中心主義と超大国主義的ナショナリズムが結合しながらグローバリゼーションを推し進めており、〈現代版帝国主義的グローバリズム〉の様相を示している。アメリカの動きに刺激されて日本や中国においても、国家という枠組みを優先させる政策に向かう動きも見え隠れしている。さらに、市場主義化や個人化などの潮流の中に見られるような、個人や個々の集団に分散する傾向は世界全体に広がり、それに後押しされる形で国家の枠組みではなく地域の住民の参画・協働と住民自治を重視するローカリズムの潮流も広がりつつある。そこから地域住民主導で全体的社会と国家の枠組みを構築し、ひいては国際社会のレベルにおけるネットワークや諸関係を生成する動きが発展するかもしれない。アメリカのリベラリズムが超大国主義的ナショナリズムを志向する限りは、本来のリベラリズムとはいえないし、ローカリズムとも相容れないものとなるだろう。

このようにローカリズム、ナショナリズム、グローバリズムの三者は時代や状況によっては対立したり結びついたりするため、お互いに一定の関係に保たれているわけではない。明治時代は日本が近代化のために開国政策を行いながら、天皇を統合の要とする国家の形成に向かう時代であったから、遷都記念祭と関連した内国勸業博覧会の京都開催と平安神宮の創建も、ある程度国家の動向に合わせる趣旨と方式でなければ国の認可を得ることは難しかった。その点は、本稿で引用した趣意書や願書の文言を見れば納得できるだろう。京都の住民たちが、自分の住んでいる京都に対する愛着からコメモレイションのプランを提案し実現のために熱心に活動した限りでは、近世京都の〈町組制度と自治精神〉に培われたローカリズム的なコメモレイションと考えられる。そこに明治国家のナショナリズムが結合して盛大なコメモレイションになり成功裡に終了した。やはり京都の人々が発意し熱心に運動した孝明天皇の奉祀・合祀事業も、天皇神格化へと傾斜していく昭和初期の軍国主義的ナショナリズムが打ち出した皇紀二千六百年奉祝事業の中に組み込まれたように見える。戦前のローカリズムとナショナリズムが結合したかのごとく見える京都のコメモレイションは、現代のローカリズムとグローバリズムに反するような性格を備えていた。だからといって、それらのコメモレイションや平安神宮そのものを全面的に批判したり否定するつもりはない。マックス・ウェーバーが指摘したように、現実は無限に多様であり相反する要素を含んでいるし、現実を捉える価値観も多様であるから、立場やまなざし如何によって対立するコメモレイション認識・評価が形成される。また、当事者の熱意や想い（主観的意味）は歴史と社会の客観的過程とは区別されなければならない。

建都1200年記念祭は、最初の1で引用した基本理念の文言からも分かるようにローカリズム、ナショナリズム、グローバリズムの三者の相互連携をめざして企画され実施されたように思われる。少なくとも相互連携の中で京都の未来を切り開こうと試みている。高い理想を掲げたコメモレイションであったが、明治期から昭和前期のようなナショナリズムの強烈な原動力

がなかっただけにやや散漫なイベントになってしまったようである。1の最後で述べたように、京都の事例に限らず、グローバリゼーションが進む中でローカリズムの精神に基づく高邁な理念を掲げた現代のコメモレイションは、多かれ少なかれ力強い求心力のないイベントに陥りがちである。どうもローカリズムやグローバリズムには、ナショナリズムが内包する強烈な求心力や原動力がないように思われる。ローカリズム、ナショナリズム、グローバリズムの三者の相克と連携の問題については、今後もじっくりと再検討していかなければならないだろう。

[補記] 本稿は、平成16年度科学研究費補助金（基盤研究（A））、ならびに神戸女学院大学研究所、研究助成金による研究成果である。

引用・参考文献

- 阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己, 1999, 『記憶のかたち』 柏書房
- Anderson, Benedict, 1983, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso: London. (=1997, 白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体』 NTT出版)
- 第四回内国勸業博覧会事務局, 1896, 『第四回内国勸業博覧会事務報告』
- 藤原正人, 1973, 『明治前期産業発達史資料勸業博覧会資料 第62巻』 明治文献資料刊行会
- Foote, Kenneth E., 1997, *Shadowed Ground: America's Landscapes of Violence and Tragedy*, University of Texas Press. (=2002, 和田光弘他訳『記念碑の語るアメリカ』 名古屋大学出版会)
- 古川隆久, 1994, 「紀元二千六百年奉祝記念事業をめぐる政治過程」『史学雑誌』 史学会, 103-9: 1-36.
- Gellner, Ernest, 1983, *Nations and Nationalism*, Oxford. (=2000, 加藤節監訳『民族とナショナリズム』 岩波書店)
- 原武史, 2001, 『可視化された帝国』 みすず書房
- 平安神宮百年史編纂委員会, 1997, 『平安神宮百年史 本文編』 平安神宮
- 平安神宮社務所, 2000, 『平安神宮写真帳』
- 平安神宮社務所, 2004, 『平安神宮略誌』
- (財)平安建都1200年記念協会, 1994, 『平安京1200年』 淡交社
- 平安遷都記念祭協賛会, 1895, 『時代祭行列図譜』 村上書院
- 平安講社, 2004, 『平安神宮時代祭』
- Hobsbawm, Eric & Ranger, Terence (eds.), 1983, *The Invention of Tradition*, Press of University of Cambridge. (=1992, 前川啓治・梶原景昭訳『創られた伝統』 紀伊國屋書店)
- 家近良樹, 2002, 『孝明天皇と「一会桑」一幕末維新の新視点』 文藝春秋社
- 伊藤幹治, 2002, 『柳田国男と文化ナショナリズム』 岩波書店
- 岩壁義光・広瀬順皓, 2001, 『太政官期地方巡幸研究便覧』 柏書房
- (株)ジェイコム, 1993, 『京都1200 公式ガイドブック』 (財)平安建都1200年記念協会
- Johnston, William M., 1991, *Celebrations: The Cult of Anniversaries in Europe and the United States Today*, Transaction Publishers. (=1993, 小池和子訳『記念祭／記念日カルト』 現代書館)
- 河合隼雄他, 1995, 『平安建都1200年記念 伝統と創生フォーラム集成』 淡交社
- 小松秀雄, 2001a, 「ミシェル・フーコーのテクノロジー論 (序論)」『神戸女学院大学論集』 神戸女学院大学研究所, 48-2: 163-184.
- , 2003b, 「京都の祇園祭の社会的再考 (中間報告) —リスク社会における〈祇園祭〉の文化的再生産をめぐる—」『神戸女学院大学論集』 神戸女学院大学研究所, 50-2: 97-121.
- , 2004c, 「大老井伊直弼のコメモレイションの文化社会史 (その1)」『神戸女学院大学論集』 神

- 戸女学院大学研究所, 51-2: 165-191.
- , 2005d, 「都市の祭りとコメモレイション」『都市のユニバーサリズム、ナショナリズム、ローカリズム』(科学研究費補助金(基盤研究(A))による報告書)
- 孝明天皇奉祀奉賛会, 1939, 『平安神宮第一号』
- 孝明天皇奉祀奉賛会, 1940, 『平安神宮第二号』
- 京都市編, 1981~1994, 『史料京都の歴史』(全16巻) 平凡社
- 京都市参事会, 1896, 『平安遷都紀念祭紀事』京都市参事会
- 京都新聞社, 1996, 『公式記録 平安建都1200年記念事業史』(助平安建都1200年記念協会)
- 宮内省編, 1967-1968復刻版, 『孝明天皇紀一~五』平安神宮
- 松田京子, 2003, 『帝国の視線 博覧会と異文化表象』吉川弘文館
- 三田誠広, 2004, 『桓武天皇—平安の霸王』作品社
- Mosse, George L., 1975, *The Nationalization of the Masses: Political Symbolism and Mass Movements in Germany from the Napoleonic Wars through the Third Reich*, Howard Fertig. (=1994, 佐藤卓己・佐藤八寿子訳『大衆の国民化ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』柏書房)
- 村上重良, 1977, 『天皇の祭祀』岩波書店
- 村尾次郎, 1963, 『桓武天皇』吉川弘文館
- 成田龍一, 2001, 『〈歴史〉はいかに語られるか 1930年代「国民物語」批判』日本放送出版協会
- 日本史研究会・京都民科歴史部会, 1995, 『京都千二百年の素顔』校倉書房
- Nora, Pierre ed., 1984-1992, *Les Lieux de Memoire: sous la direction de Pierre Nora*, Gallimard. (=2002-2003, 谷川稔監訳『記憶の場』岩波書店)
- 大阪府内務部第五課, 1896, 『第四回内国勸業博覧会報告書』
- 大澤真幸, 2002, 『ナショナリズム論の名著50』平凡社
- 笹山晴生, 1991, 『古代を考える 平安の都』吉川弘文館
- 佐藤健二, 2001, 『歴史社会学の作法 戦後社会科学批判』岩波書店
- 佐藤秀夫, 1994, 『続・現代史資料 8 教育御真影と教育勅語 I』みすず書房
- シーグ社出版, 1995, 『時代装束—時代祭資料集成—』京都書院
- 神道史学会, 1966, 『神道史研究 特輯 孝明天皇と平安神宮』14-5・6
- Smith, Anthony D., 1986, *The Ethnic Origins of Nations*, Blackwell. (=1999, 巢山靖司・高城和義訳『ネイションとエスニシティ 歴史社会的考察』名古屋大学出版会)
- 鈴木正幸, 1994, 『皇室制度—明治から戦後まで—』岩波書店
- 多木浩二, 2002, 『天皇の肖像』岩波書店
- 武智秀之, 2004, 『都市政府とガバナンス』中央大学出版部
- 筒井清忠, 1997a, 『歴史社会学のフロンティア』人文書院
- , 1999b, 『日本の歴史社会学』岩波書店
- 所功, 1994, 「平安神宮の創建前史」『神道史研究』神道史学会, 42-4: 56-87.
- 所功, 1996, 『京都の三大祭』角川書店
- 徳重浅吉, 1936, 『孝明天皇御事績紀』東光社
- 碓井敏正, 2004, 『グローバル・ガバナンスの時代へ—ナショナリズムを超えて』大月書店
- 若松雅太郎, 1896, 『平安遷都千百年紀念祭協賛誌』平安遷都千百年紀念祭協賛会(1994年復刻版, 『明治後期産業発達史資料 第192~194巻』龍溪書舎)
- 山口二郎・山崎幹根・遠藤乾, 2003, 『グローバル化時代の地方ガバナンス』岩波書店
- 安丸良夫, 2001, 『近代天皇像の形成』岩波書店
- 吉見俊哉, 1992, 『博覧会の政治学—まなざしの近代』中央公論新社

(原稿受理 2005年4月5日)